

課題探求プロジェクト(I・II・III A・III B) グローバルアプローチ

2018年4月～2019年2月

活動成果報告書

目次

はじめに.....	1
課題探求プロジェクトI （2年次前期：グローバルアプローチ）.....	3
課題探求プロジェクトIII A （3年次前期：グローバルアプローチ）.....	18
課題探求プロジェクトII／課題探求プロジェクトIII B （2年次後期／3年次後期：グローバルアプローチ）.....	38
おわりに.....	65

はじめに

国際地域学部が創設されてから間もなく3年が経とうとしていますが、本学部の基幹科目として設けられた一連の課題探究プロジェクト科目も、1年次後期に開講された「基礎」、2年次生を対象にした「Ⅰ（前期）、Ⅱ（後期）」に加えて、今年度より3年次生を対象とする「ⅢA（前期）、ⅢB（後期）」が開講され、いよいよ全科目の本格的な運営が開始されることとなりました。Project Based Learningの頭文字を使ってPBLとも称される同科目は、「地域や国際社会が抱える諸課題の探究と解決に能動的に取り組む科目」であり、本学部の履修手引きでは、「実践的な事例研究やワークショップ等を含むプロジェクト学習を継続的に深めながら、専門学問分野の知識と方法を修得」することが、その目的として謳われています。

近年、大学教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性が盛んに唱えられ、それを実現するための授業形態として、多くの大学・学部がPBLを授業に取り入れるようになりました。今や時代のトレンドとなった観すらあるPBLは、文系・理系を問わず幅広い分野で実践されていますが、「実践的な事例研究やワークショップ等を含むプロジェクト学習」がなじむ分野となじまない分野があることは否定できません。学際的な研究が広まり、学問分野を単純に分けることができない時代になりましたが、文系の分野でいえば、PBLとの相性という点で社会科学が人文科学よりも勝っていることは、本学部のケースを見ても明らかでしょう。

現在、地域創生アプローチの学生を対象に開講されている10のプロジェクトは、企業や自治体での研修を軸に据えたものが大半を占め、いずれにも社会科学的な性格が顕著に見て取れます。一方、グローバルアプローチの学生を対象とするプロジェクトは、当初、福井県内の酒蔵等をフィールドとするものしか実施されていませんでしたが、このプロジェクトもやはり、社会科学の範疇に含めることができます。このように本学部のPBLの内容が社会科学一辺倒である点、さらには、グローバルアプローチの学生にはプロジェクトの選択肢がない点を問題視し、欧米や中国の文学や言語、文化を専門とする教員が協力して、人文科学的な性格を持つプロジェクトを立ち上げることになりました。

「Ⅰ（2年次前期）」のプロジェクトでは、毎年10月に開催されている福井国際フェスティバルにブース出展者として、さらには運営スタッフとして参画する取り組みが実施されました。「Ⅰ（2年次前期）」が教育地域科学部時代の地域課題ワークショップ科目を継承したものであるのに対して、「Ⅱ（2年次後期）」及び「ⅢA（3年次前期）、ⅢB（3年次後期）」のプロジェクトは新規の試みであり、いずれも映画に関連するものとなりました。映画は、かつて「第七芸術」と呼ばれたこともあり、芸術・文化として捉えることができますが、他の諸芸術との顕著な相違は、産業的・商業的な側面を色濃

く持ち合わせている点にあります。したがって、映画に対しては人文科学的なアプローチのみならず、社会科学的なアプローチも可能なのであり、その点において、映画というテーマは課題探究プロジェクト科目の趣旨になじむものであると言えるでしょう。

「ⅢA」では、星空の下での野外上映会を開催しましたが、こうした取り組みは次年度以降も継続して実施してゆきたいと考えています。「Ⅱ」と「ⅢB」は、今年度限りの試みとなりますが、学年を超えた合同クラスで実施されました。プロデューサーをはじめとして福井に所縁のある方が少なからず制作に加わっておられる日本とミャンマーの合作映画、そしてそれを福井県内で上映する映画館。その双方に光を当てながら、地方において観ることのできる映画作品の多様性が損なわれつつある現状について、学生たちが地域住民と一緒に考える機会となるイベントの開催にこぎつけることができました。

これら三つのプロジェクトの詳細につきましては、主に学生たちの言葉で紡がれた本報告書の次頁以降の記述をお読みいただくとともに、皆様の忌憚のないご意見・ご感想を賜ることができれば、幸いに存じます。最後になりましたが、三つのプロジェクトを陰になり日向になり支えてくださった福井県国際交流協会、(株)ムービーマネジメントカンパニー、(有)スペース源内、福井市役所公園課、福井大学工学研究科明石研究室の皆様、映画プロデューサー渡邊一孝氏、そして根岸輝尚氏をはじめとする福井メトロ劇場の皆様方に、担当教員一同、心より御礼を申し上げます。

2019年3月 担当教員一同

課題探求プロジェクト I (2年次前期：グローバルアプローチ)

1. プロジェクトの構成と概要

1) 授業のアウトライン

地域課題の発見と解決に取り組み、その成果を福井県国際交流協会が主催する「福井国際フェスティバル」のなかで企画展示として発表し、同協会にて実習も行った。その活動は次の二点に大別される。

- ① 授業時の活動は、大学およびヒアリング調査のために校外（福井県国際交流協会、越前和紙の里等）で行った。
- ② 授業時の活動と並行して、6月以降、福井県国際交流協会が催す会議等に参加し、国際的催事のための企画・運営を担当した。

同フェスティバルは、福井県内で外国人と地域住民とが交流する催しとして毎年秋に福井県国際交流会館において行われており、2018年で22回目の開催となる。毎年の来場者数は約5,000名である。



2) 授業の進行

課題探求プロジェクト I	福井県国際交流会館での実習
第1回 2018年4月11日	企画運営委員会(第1回) 2018年6月17日
第2回 2018年4月25日	企画運営委員会(第2回) 2018年7月15日
第3回 2018年5月9日	企画運営委員会(第3回) 2018年8月19日
第4回 2018年5月30日	企画運営委員会(第4回) 2018年9月2日
第5回 2018年6月13日	企画運営委員会(第5回) 2018年10月7日
第6回 2018年6月27日	前日準備 2018年10月20日
第7回 2018年7月11日	福井国際フェスティバル当日 2018年10月21日
第8回 2018年7月25日	企画運営委員会(第6回) 2018年11月18日
反省会、成果報告 2018年10月24日	

- ① 各回の授業は、基本的には2コマ（3時間）連続で実施された。
- ② 最終成果発表として、年度末にグローバルアプローチのもう一つの課題探求プロジェクト「酒蔵プロジェクト」と合同での成果報告会（2018年1月24日）を実施した。

3) 授業の目的

- ① 福井や地域社会における外国人の現状を理解し、とりわけ文化と言語の観点から、課題の発見と探究に当たる。
- ② 学生が主体となって、ヒアリング調査等を行い、地域住民や外国人との協働のあり方を学ぶ。
- ③ 地域社会をグローバルな視点で複眼的に眺める姿勢を身につける。
- ④ 国際的催事にスタッフとして参加することにより、地域住民や外国人と交流し、実践的なコミュニケーション能力を養う。

2. 受講生による報告

1) 活動内容

◆授業での活動：

(A) 10月下旬の「国際フェスティバル2018」の本番に向けた企画作成や準備は4月下旬から始まった。参加したメンバーは10人余りと比較的多かったため、大きく分けて2チームでそれぞれが「福井大学からのコーナー」として企画を練った。PBLが始まってから初めの数回の授業は、福井県について詳しく知るための講義を受けた。具体的には福井県で盛んな産業について、福井在住外国人の国別人口、彼らが抱える生活上の問題や現状、高齢化問題などのテーマである。基本的に担当教員の先生方の講義だが、そのうちの一回は「インターナショナルクラブ」の山下さんをお招きして、日本に來ている外国人が抱える労働、結婚、日本在住などの現状や課題を教わった。これらの講義を受けて福井県についての基礎知識を得たうえで、「多文化共生」を大きなテーマとしながら、福井県が現在抱えている問題は何か（例えば、福井に住む日本人と外国人とのコミュニケーションが希薄で、それが災害時に被害拡大等の欠点を招きうることを考え、意見を共有して、解決につながるようなコーナーをフェスティバルで展示するという目標を持った。先に述べた二つのチームとは、福井県の魅力を発信していくことに焦点をあてた班と福井県における在日外国人の居住問題に関する班の2チームである。私は前者の福井の魅力発信をしていくという班で活動した。よって、以降は主にこの班の活動や成果について述べていく。

数回の講義では、外国人が抱える問題だけではなく、福井の強みとなる産業も学んだ。そこから、学生（特に県外から来た）がまだ知らない福井の名産品がまだまだたくさんあるのではないかと考え、班の皆でインターネットなどを活用しながら、できるだけ多くの

名産物を挙げてみた。すると、予想していたよりはるかに多くの食品や工芸品、そして観光地がヒットした。そこで次の疑問は、これほどたくさんある名産品がどうして私たちの耳に入らないのかという点である。この問題の原因として、宣伝力の欠如を挙げた。例えば、SNS やインターネットの口コミサイトなどでの情報の少なさなどである。このような過程を経て、国際フェスティバルにて、来場者に福井の魅力を知らせてもらおうという案にたどり着いた。楽しんでもらうことを大前提としていたので、「脱出ゲーム」という形式で、福井に関するクイズや越前和紙を使ったしおり作りをゲームに混ぜ込んだ。さらにしっぽとりゲームで小さな子供向けのコーナーを混ぜ、多言語に触れてみようという遊びの企画、「Let's 外国語」をつくり、大学生と来場者が英語、マレー語、イタリア語でじゃんけんをして遊ぶコーナーも混ぜた。これらを準備するために、班の皆で「越前和紙の里」へ行き紙すき体験をし、福井大学のアメリカ人、イタリア人の先生や留学生に彼らの母語でのコミュニケーションを学んだ。

(B) 最初、私たちは2つのグループに分かれた。1つは、福井の魅力をアピールするグループ、もう一つは地域に居住する外国人が抱える問題点について探求するグループであった。私は2つ目の地域に居住する外国人のグループで活動した。はじめは、それぞれのグループで話し合いなどを通して、どのような展示にするかを考えた。私たちのグループでは、まず外国人が抱える問題にはどのようなものがあるのかを考え、リストアップした。その問題を、国際交流フェスティバルに来てくださる方々に知ってもらえるような展示にしようという案がでた。リストアップされた問題としては、日本では地震などの災害が多いが、外国人の方々はその危険性についての認知度が低いこと、ごみの分別の方法がわからない外国人がいること、人と接する上でのマナー、食品の原材料などの表記が読めないことの大変さ、外国人労働者は夜間の労働が多く昼間に地域の方と交流できないということ、外国人というマイノリティの怖さ、などがあげられた。外国人が抱える問題についての認識が高まったところで、その問題を多くの人に知ってもらうにはどうしたらよいか話し合った。ゲームや寸劇を使って楽しみながら知ってもらえるものや、いろいろなクイズを作って出題し、お客さんに考えてもらうもの、模造紙を使って展示するものなどの案が出た。そこで、私たちのグループには7人いたため、さらに3つのグループに分かれて活動することにした。表示グループ、防災グループ、標識グループ、に分かれた。表示グループは、実際に多言語で表示された食品を買ってもらうというゲーム、防災グループは、防災に関するクイズ、そして私が所属した標識グループは、展示と展示型クイズという形で最終決定した。私は、外国の道路標識の紹介とクイズ、2020年の東京オリンピックに向けて変わる日本の地図記号の紹介のポスターを作製し、展示として貼る方法で紹介した。さらに、オリジナル標識を作ろうというコーナーを作り、子供や大人も楽しめるような展示にした。道路標識のクイズは、答えと解説を隠し、めくると分かる仕様にした。

(C) 授業の活動で工夫したことは、その日の授業の目標設定をすることで、大きい目標だけでなく、小さい目標を立てることで、効率的に授業を進めることができた。また、司会役や書記を決めたり、役を決めたり、ブレインストーミングの時にみんなが意見を言いやすい雰囲気づくりやブレインストーミングする時は口頭で言うのではなく、紙に書くことで、誰かがいったことに影響されたりして、自分の意見を変えさせたりさせずに、その人たちの意見を尊重する工夫をした。得られたものとして、どのようにして企画するかというプロセスを知ることができたし、今までインプットしてきたことをアウトプットしもっと知識を知恵に変えることができた。

◆国際交流会館での活動：

(A) 私は、企画運営委員会では、地下部会に参加し、書記を担当した。地下では、外部から出演者を呼び、ステージで歌やダンスを披露してもらおうというものだった。出演者は、去年に引き続きなど決まっているものもあり、おもに地下ホワイエでの展示などをどうするかと、他にステージでやるイベントなどについて話し合った。ホワイエでの展示は、若者に人気のインスタ映えするスポットを作成し設置することになった。ステージでのイベントは、ファッションショーをやろうという話になった。最初は、高校生の制服ファッションショーをやりたいという話だったが、学校側や未成年などの問題があり、無くなった。ほかに、民族衣装のファッションショーをやるという案があったので、そちらを実際にやることになった。前日準備では、地下でおこなわれるイベントのプログラムを模造紙に書いてすべての階に貼ったり、出演者が着替えるスペースを作り床にブルーシートを敷き窓に新聞紙を貼ったり、ステージの作成をしたりした。当日は、ダンスや歌で使う音源 CD を出演者から受け取り裏に渡しに行くという仕事をした。

(B) 私は総務部会に所属した。総務部では特別何か企画を考えるようなことはなかったが、チラシの裏面のレイアウトを考えたり、各企画運営委員のプロフィールを集めたりした。チラシの裏面のレイアウトは、タイムスケジュールを載せるのか地図を載せるのか、英訳を載せるのかなど議論が白熱した。結果、まず来てもらうことが目的なので、タイムスケジュールや地図は後回しにして、コンテンツの紹介に焦点を当てたものにした。また、英訳も載せると字が多くて読みにくくなることから、今年は英語バージョンは別にした。各企画運営委員会のプロフィールは、国際的なことに興味を持っている人が、ボランティア・来場者問わずに交流してほしいという思いから、どんな人たちが企画しているのか興味を持ってもらうことで、来場者を増やそうという考えのもと SNS における宣伝で活用した。

(C) 私は今回のフェスティバルでは 2 階部会に所属し、そこでは 2 階部会長を務めることになった。2 階は例年どおり福井大学をはじめ、京都外国語大学や J I C A などの団体が会議室や研修室を使用し、子供向けのゲームや出し物を用意した。京都外国語大学は忍者ゲ

ームや英語で紙芝居などこどもが楽しく遊べるような出し物が用意されていた。JICAでは民族衣装体験や小物づくりなど体験型の出し物がされていた。また、JICAのブースの一部で福井市環境推進課の主催する環境に関するクイズやワークショップも開催された。さらに、今年初の取り組みとして、2階の通路の部分に「おとなランド」「こどもランド」の設置がされ、この企画に私も大きく関わった。おとなランドでは3つのテーブルを用意し、ボランティアの方にホストをお願いして各国のボードゲームやカードゲームなどを大人向けに開催した。また、こどもランドでは「レゴコーナー」、「プラレールコーナー」、「お絵描きコーナー」を用意し、こどもたちが自由にレゴブロックやプラレールを使用して遊べるブースを設置した。

毎月開催されていた部会では、部会長は2階部会での進行を務めたり、意見をまとめたり提案したりということをした。前日準備や当日は各出し物を見回ったり、写真を撮ったりもした。

(D) 国際交流会館で月1くらいの頻度で行われていた実行委員会の会議では、私は3階の部会に参加していたため、2階部会である防災クイズに関しては携われなかった。3階のほうでは、日本の伝統文化や遊びを体験して日本の文化に親しんでもらう日本人度チェックというものを企画した。お手玉、折り紙、けん玉、書道、めんこ、お茶会のそれぞれのコーナーに参加するとスタンプがもらえ、最後に受付でスタンプの個数によって景品のお菓子がもらえるという仕組みだ。当日ボランティアの人も加えると、私たち福大生3人を中心に、高校生や大人の方とともにそれぞれ持ち場に分かれて作業をした。当日ボランティアの方が思っていたよりも私たちの部会に来てくれたので、私は一つの担当コーナーを持たずに、当日は2階の防災クイズのところで活動できた。当日は3階の日本人度チェックのコーナーに携われなかったが、事前の準備は前日の夕方まで3階の手伝いをしたし、2階の片づけが終わり次第3階の手伝いへ行った。実行委員会のある日だけでは3階の準備が十分でなく、何も無い日曜日に3階部会だけで国際交流会館に集まって説明書きや折り紙の見本の紙などを作成や買い出しに行った。防災クイズのコーナーのレイアウトは高橋君がしてくれた。当日は、高橋君が問題の出題と答え合わせをしてくれていたのので、私は買い物ゲームや標識のコーナーを見ただけで帰りそうなお客さんを呼び込んだり、選択肢に分かれて入るところの裏に回って、待っている人に話しかけて交流を図ったり主にサポートをした。

【2】活動の成果

◆工夫した点：

(A) 地域に居住する外国人が抱える問題について、お客さんに楽しみながら知ってもらえるように工夫した。説明だけではなくクイズを作ったり、オリジナル標識を作るというコーナーを作ったりすることで子供も楽しめるように工夫した。展示物は、子供にもわかり

やすいように簡単な日本語を使って作成した。オリジナル標識を作ろうというコーナーでは、書きやすいように丸や三角の型を厚紙で作り、周りをなぞるだけで書けるようにした。「ながらスマホ注意」というテーマで作るようにし、自分たちで書いた見本を提示することでイメージがわきやすいようにした。

(B) 僕が関わったのが「買い物クイズ」であり、その意図としては、日本人の来場者の方に、文字が全く読めない中で買い物をする難しさを知ってもらい、外国人居住者の立場の視点を持ってもらおうというものだった。そのクイズ作成に当たって、どのようにクイズの内容を難しくするのか、実際に買い物をするときには人はどこを見て商品进行判断しているのかについて考え、実際に他のお客さんから見える形に再現するのが難しかった。いっそのこと、全く分からないようにイラストや工作をして物を作り、お客さんに解いてもらうようにしようかとも思った。実際、先生方に報告したときにそのような形式を提案してもらった。しかし、僕はどうしてもその「買い物クイズ」に対して謎解きの要素、クイズ性を入れることが絶対に必要だと考えた。なぜなら、そのクイズ性、つまり納得する答えが無いとお客さんは不満を抱くと考えていたからだ。そのクイズ性と、自分たちがお客さんに伝えたい課題の要素を両立させるために、どんな商品をクイズの商品として採用するか、どのような形式で出題するかによくの時間を費やした。メンバーの二人と話し合った結果、お客さんに渡す買い物リストには、三つの商品を書きそれを合わせて十二個の商品の中から選んでもらうという形式になった。実際の選び方も、商品に数字を割り振り、その数字を買い物リストの商品の横に記入してもらおうという形になった。商品は、色付きの画用紙を、商品の形や、実際の商品に使われているイラストのように切り取り、それを画用紙に貼り付けることで、選ぶ商品を作成した。また、メンバーと話し合い、あくまで子供連れの家族が対象ということで、お子さんにも解けるような内容のクイズにするために、買い物リストに載せる三つの商品の内、二つは明らかに見てわかるような食材を入れ、最後の一つは保護者の方と考えなければ分からないような商品にすると決定した。その最後の一つを保護者の方が一緒に考えることによって、保護者の方にも、僕たちが伝えたい課題を感じてもらおうと意図した。アレルギー表示や、ハラールなどを難しい商品として取り入れた。お客さんが楽しめ、かつ自分たちの扱いたい課題を実現するために考えたことが、様々な方向からの視点を得ることが出来た。

(C) 私が一番工夫したと思う点は、やはり課題解決という側面とフェスティバルという楽しさの側面の両立であると思う。その二つを両立させることは簡単でないと判断し、課題解決重視のコンテンツと楽しさ重視のコンテンツを分離させることが可能な脱出ゲームという発想を生み出したことは非常に工夫した点であると思う。さらに、課題重視、楽しさ重視と分離していながらも少しでも課題重視のコンテンツをより楽しいものにするためにも多くの工夫を施した。私の担当した伝統産業紹介のコンテンツでは紹介する伝統産業を

和紙に決定した後、普通に紹介しただけでは子供たちにとって面白くないであろう伝統紹介をどうしたら面白くできるのかについて話し合った。子供たちが楽しむために何が重要かというのを考えたときに、何か実際に体験できるコンテンツなら子供たちも楽しむことができるのではないかと考えしおり作りというコンテンツを決定した。さらに、ただ白い和紙にお絵描きやデコレーションをしてもらうだけでは子供たちの興味が引き付けられないだろうと考え、色鮮やかな和紙を用意し、子供にとって難しく、面倒くさいだろう型を切り抜くといった手順は私たちのほうであらかじめ行い、子供にはある程度簡単な作業をするだけでしおりを作れるように工夫した。

◆困難を感じた点：

(A) この課題探求プロジェクトを行う上で最も難しかったのは、どうやって地域の課題探求の要素を盛り込むかであった。国際交流会館の方々には、国際交流フェスティバルなどで国際的な楽しめるものにしてほしいと言われ、今の福井の抱える課題をどう関連付けるか、そしてフェスティバルという舞台で、来場者の興味を集めて実際に見てもらえる企画とはどういうものかというのをみんなで頭を悩ませた。始めは国際交流フェスティバルという名前から外国人の方が多いのかなと予測したが、昨年までをデータを見て日本国籍の親子ずれが多いことが分かった。そこで、私たちは福井の知名度を上げること、より多くの人たちに福井のことについて知ってもらうことが目的であったため、展示ではなく参加型のアトラクションのような企画にした。また、内容が国際的かどうかということだけでなく、地方の福井のことに重きを置くコンテンツになったとしても、見せ方次第だという意見も多くあったので、子供の興味を引けるような少しワクワクするようなフェスティバルらしさを目標にした。また、「国際的＝英語」ではないという考えのもと、いろんな国の言語に触れるブースも盛り込み、来場者の集まる福井と外国語を知れる企画を形にすることがとても大変だった。

(B) 一番困難に感じたことはやはり、自分たちが何をするのかを決める際である。授業として課題解決の要素を入れつつフェスティバルとして楽しさの要素をどのように入れるのかをはじめとして、まず「福井の知名度の低さ」という課題解決だけの部分にしても、どのような催しをしたら、うまくお客さんに伝わるのか、福井のどの部分にフォーカスするのかと決めることは多数あった。そういった問題点をひとつひとつ潰していくというのには大きな時間がかかった。その上脱出ゲームという大枠が決まった後もどのようなコンテンツをやるのか、どうやってコンテンツを面白くするのかとさらなる課題がとめどなくあふれてきた。やはりこれらをひとつひとつ潰していくには莫大な時間がかかった。最終的な決定は10月に入ってからであったため、当日までに時間がなく事前準備に関しても時間がない中で、急ピッチで進めるほかなかったのも苦労した点の一つであろう。

(C) 3階のコーナーにも課題があった。それはレイアウトである。三階に上ってきた人が一番初めに目につくのは、福井県の国際交流関係団体連絡会の賑やかな展示であった。たとえ「日本人度チェック」の受付をしても、チェック表をもったまま展示にくぎ付けになり、そのまま展示物のほうへ流れていく人も少なくなかった。また、3階では、休憩スペースも用意されていたが、休憩スペース場の入り口が「日本人度チェック」の受付用機の後ろにあったため、通れる道はあるものの、休みたいと思って3階に来た人が部屋に入りにくかったという問題点があった。そこで、受付の機の向きを変えたり看板の位置を急遽ずらしたりしながら、調整した。少しは改善されたが、位置を変えた後も部屋の外のいすで休憩する人もまだいたため、中に入りにくかったと感じさせていたならば来場者に申し訳ないと感じ、課題として次回の参考になればよいと思う。また、3階の企画運営委員会では「日本人度チェック」についてのみが毎回の議題だったが、休憩スペースのカフェの担当者、福井県国際交流関係団体連絡会の担当者など3階の出展に関わるすべての方々と「レイアウトについて」など、月1の委員会で打ち合わせをする必要があると思う。

◆得られた成果：

(A) 地域に居住する外国人の抱える問題や、外国人労働者の現状などを知り、考えることができた。また、展示の作成を通して、日本の標識と海外の標識の違いも知ることができた。外国人目線になって、表記を理解する難しさや、日本人でも知らなかった防災に関する知識を得ることができた。イベントの企画・運営の大変さと、達成感を感じることもできた。

(B) 自分達が紹介した標識や記号についてはもちろんのこと、それらを調べることを通して、今ある標識や記号の裏にはその国の文化や歴史が深く関わっていることを知ることができた。また外国人観光客や在日外国人にとってわかりやすい（世界でも通用する）標識・や記号について考えさせられるきっかけとなった。

(C) 私が今回の出し物で得られた成果として、楽しませることの難しさを知ることができたという点である。子供向けである以上、なるべく漢字や難しい言葉を使うべきではなかったし、一見して何をしているかわかるように気を使わなくてはならないことがわかった。また、自分たちが伝えたいとおもうものがあるのなら、自分から積極的にアプローチしていかないと伝わらないということも分かった。すべてのお客さんに対する細やかな気遣いが成功の秘訣であることを知ることができた。

(D) 脱出ゲームに参加してくれた子供たちはかなり楽しんでいってくれたようだった。越前和紙を実際にしおりにして持って帰ってもらったので、家に帰ってからでも福井はこんなものが有名なんだというように子供が興味を持つきっかけを提供できたのではないだろう

うか。また、今年はアンケートを取ったので、来年の企画作りの参考にしてもらえたらと思う。

【3】展示物（パネルまたは映像）について

◆全体の構成：

(A) 個々のコンテンツに関して、一つ目は「福井クイズ」である。ターゲットが子供であるので、このクイズを通して、福井で有名なものについて知ってもらおうというコンテンツである。当日は4つの問題を用意し、へしこや足羽川の桜、恐竜といった福井の有名な魅力についての知識を増やしてもらった。2つ目の出し物は「和紙でのしおり作り」である。このコンテンツは福井の伝統産業である和紙について知ってもらうこと、そして越前和紙の里という実際に和紙作りを体験することができる施設があることを知ってもらうという二つの目的がある。実際に我々が越前和紙の里に行き和紙作りを体験することで得た知識をもとになるべく和紙作りに近い工程になるように作業工程を決めた。具体的に述べるとまずしおりの土台作り、これは和紙作り体験における紙すきに当たる。その後、できた台紙に好きな形や色の飾りつけをしてもらった。これも和紙体験に同じような作業がある。また実際に越前和紙の里に行った際に買った色鮮やかな実際の和紙を素材に使うことで子供たちにしっかり和紙のことを知ってもらうことができたと思う。3つ目のコンテンツは「しっぽとり」である。これは課題に一切の関係がなく、子供たちに存分に楽しんでもらうためのコンテンツである。我々の思惑通り実際に一番人気であったのもこのコンテンツである。内容としてはその名前通り、しっぽをつけた大学生からしっぽをとるといだけのコンテンツである。意外なことにこのコンテンツでは子供だけでなく大人も子供の用に楽しんでいたのが印象的である。4つ目のコンテンツは「Let's 外国語」である。このコンテンツは福井大学国際地域学部グローバルアプローチという特性を生かした外国語を利用したコンテンツである。様々な外国語を利用して、大学生とじゃんけんをして遊ぶというのがこのコンテンツの内容である。

(B) 標識グループは、展示物として2つのポスターを作った。1つは、模造紙に、東京オリンピックに向けて変わる日本の地図記号の紹介を、画像と文章を使って描いた。もう1つは、世界の標識・記号の紹介とクイズを、模造紙に描いた。クイズは、答えと解説の上に画用紙を貼って見えないようにし、めくると分かるようにした。オリジナル標識を作ろうコーナーでは、模造紙に、ながらスマホの説明と、作り方の説明を書き、自分たちで作成した見本も貼った。

(C) 防災クイズに関しては、画用紙に問題文と選択肢とそれに見合うイラストを日本語と英語で表記し、それを合計9個作った。その問題をグループ3問くらい出題するつもりだった。実際はその人によって1問で終わったり何問も出題したりとお客さんに合わせた。

選択肢によって分かれて仕切られたところに入ってもらい、そこに椅子を用意しておくといったレイアウトにした。「A」「B」「C」の表記は模造紙に大きく書いた。2階の福大生の他の企画である買い物ゲームと標識の展示と同じ部屋で行った。その部屋の一番奥のほうのスペースで行った。

◆作成した展示物を、実際に展示してみたときの所感、反省点：

(A) 私が担当したのは、福井クイズと、アンケートの作成だ。アンケートは、つぎに企画・運営に携わる国際地域学部の学生のためにとったので、存分に活用してほしい。福井クイズでは、福井にかかわる問題を4つ用意した。例えば、「日本桜名所百選にも選ばれている、福井で桜がきれいに見える場所は、つぎのうちどれでしょう。①福井大学②足羽川③永平寺」といったものだ。子どもさんと、親御さんと一緒に解いて楽しんでもらえたらと考えていた。当日は、親子で話し合いながら問題を解いている様子も見られた。子どもだけで来る場合もあったが、その際には学生が付き、「福井で、桜がすごくきれいに見えるところはどこだと思う？」など、わかりやすい言葉に置き換えながら一緒にクイズを解いていった。子どもたちの笑顔はとても温かく、一日の活動の疲れも癒してくれた。

全体について少し触れると、来場していただいた方は、9割5分子ども連れの方だった。来年、国際フェスティバルでの展示物を考える際は、それをまず念頭に置くべきである。子どもさんが楽しめる、わかりやすく、大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんたちとも触れ合える、学びのあるもの。これがとても難しくあるが、重要なのだと思う。

(B) はじめは、2つのポスターが、オリジナル標識作りのコーナーの奥に貼られていたため、見にくかったが、途中で2つのポスターを入り口付近に移動させ、見やすく配置したところ、ポスターを見てくださる方やクイズの答えをめくって反応してくださる方が増えた。オリジナル標識を作ろうというコーナーは、子供が楽しんで書いてくれると思っていたが、実際はあまり書いてくれなかった。テーマが「ながらスマホ注意」だったので、子供には難しかったというのと、大人の方も書いてくださると思ったが、子供向けだと思ってあまり書いてもらえなかった。また、自分たちで書いた見本が、参考になると思っていたが、お客さんから、「こんなにうまく書けない」と言われてしまい、逆効果だった。「ながらスマホ注意」というテーマも、限定してしまったためにアイデアが思い浮かびにくく、書きにくかったと思われる。途中で、ホワイトボードに「テーマは何でもいいよ」「自分が、こんな標識があつたらいいなと思うものを書いてもいいよ」などと書き加えると、書いてくれる方が増えた。オリジナル標識を作ろうのコーナーは、他のコーナーよりも奥にあつたため、見つけにくかったことも原因であつたと思われる。ポスターは、漢字を使っていたが読み仮名を振っていなかったのと、日本語だけで書いていたため、外国人のお客さんのことも考えて英語でも書いたほうがよかつたと思った。

(C) 私が実際にこのイベントを行ってみて感じたことは、やはり子供の数が圧倒的に多いということなので、ターゲットに据えるのは必然的に子供になると思われる。また国際フェスティバルであるもののほとんど外国人の方とは合わなかったので、外国人の方をターゲットに据えるのはおすすめしない。実際に私たちがやったなかで人気が出るのはやはり体験型のコンテンツや見栄えがするコンテンツである。我々が独自にとったアンケートでも圧倒的にしっぽりをはじめとする体験型コンテンツや色鮮やかな和紙を使ったコンテンツが人気であった。このデータも考慮に入れて考えるとよいかもしいない。

【4】総括

◆反省点：

(A) 最初のほうは、国際交流フェスティバルに対するイメージがわきにくかったということもあり、なかなかアイデアが浮かばず、どのような展示にするか決めるのが遅くなってしまった。最終的に決定したのが夏休み前で、本格的に準備を始めたのは夏休み後になってしまったが、授業時間外も展示物の作成を進め、なんとか間に合った。もう少し早く案を決定し、準備を進められたらよかったと思った。当日は、地下部会の仕事が少なかったため、自分たちの展示にも行くことができた。お客さんが自分たちのポスターを見てくださっているときに、話しかけてより詳しい説明ができたならよかったと思った。また、私たちは2つのグループに分かれて活動していたが、もう一つのグループがどのような活動をしているのかがあまり把握できていなかったもので、グループ間での情報共有をもっとできたらよかったと思う。

(B) 3階の日本人度チェックのコーナーに関しては、まず、3階まで足を運んでもらえるかという課題があったため、2階のエレベーターのところに3階でやっていることに興味を引くような言い回しで宣伝するための簡単なポスターや、書道を壁などに貼った。また、2階から3階にかけての階段を折り紙の鎖やお花でデコレーションした。何もしないより断然人の気を引いていてよかったのではないかと感じた。階段を上がったところには模造紙に「日本人度チェック」と見出しを大きく書き、日本文化に関するイラストをちりばめて書いて少し華やかにできたと思う。3階は折り紙の鎖やお花、さまざまに追った折り紙で飾りつけをしていたので、楽しい雰囲気を作れたのではないかと感じた。私はずっと防災のコーナーにいたので見るができなかったが、みんなが折った折り紙で福井県の形を作るといったものがあり、それが色とりどりでかわいくなったと聞いた。また、これも私は実際に見ていなかったのだが、みんなが書いてくれた習字をパネルに貼るといったものも、当日はみんなの習字でパネルがうまったと聞いた。防災クイズのコーナーに関しては、私たちの使わせていただいた部屋が奥のほうにあったので人が来にくかった。しかし、ドアを常に開けておいて、そのドアのところにホワイトボードで「おとなりさんは外国人」という見出しとともに、何をやっているかを簡単な単語で表記した。これは当日お手伝いに

来てくれた大野さんと坂井さんが書いてくれたのだが、これがあつたおかげでここは何をするコーナーか分かってとてもよかったと思う。「A」「B」「C」の表記も、大きくてよかったと思う。防災クイズをやっていかずに帰られるお客さんもいたので、防災クイズの見出しも用意できていればよかったと思う。

(C) 最終的に完成した展示や当日のお客の反応を見て振り返ると、PBL が始まってすぐの話し合いで決まった目標のようなものである、福井に住む外国人の抱えている問題を身近な人に知ってもらうということがあまり達成できていなかったと思う。ポスター制作にあたり、標識・記号をわかりやすく紹介することばかり考えてしまい、外国人にとって標識や記号がわかりにくかったり、時には目印にもなったりする重要な存在であることが伝え切れていないと感じた。満足いく展示にはなったが、当初の目的を再確認してればより完成度の高い展示になっていたかもしれないと思った。

◆後輩に伝えるべきアドバイス：

(A) 後輩に伝えるべきアドバイスとしては、課題探求プロジェクトとして自分たちの出し物を考えるのであれば、かなり、学習的な要素を強くしないと、説明なしでは伝わらないと感じた。それだと、国際フェスティバルの楽しむ要素と合わせるのが困難になり、企画の実現性が低くなると考えられる。そのさい、相手のメリットとなることを明確に提示するなどの交渉術が必要になると思うので、頑張ってください。

(B) 今回フェスティバルの企画運営に参加したことを踏まえて次回のフェスティバルに関わる2年生に一番伝えたいことは「課題探求の側面とフェスティバルとしての側面の両立ができるように企画を考えること」だ。私たちは福大生として課題探究プロジェクトという授業の一環としてフェスティバルに参加するが、国際会館側としてはフェスティバルの1コンテンツとして参加者が楽しめて、フェスティバルが盛り上がるような企画を求めているのであまり展示がメインだったり、学術的な内容の企画は求められていない。したがって、いかに参加者に楽しんでもらいながら、テーマとなっている事例や問題に関心を持ってもらえるような企画を作れるかが重要になってくる。

(C) ある班が当日にお客さんがその人たちの展示に対する興味を示さないと気づき、彼女たちはそこで諦めるのではなく、なんでお客さんが興味を引かないのかという原因を彼女なりに考え、その原因にすぐに対処した。彼女たちはそれで人の集客が増えたと言っていたが、それは時間等も関係してくるため、その対処法が本当に根本的な解決策だったかという点不確定だが、私が大切だと思ったのは、すぐに問題に気づき、対処方を考え、それを実行したという最後まであきらめない心だと思った。ぜひ、諦めず最後までがんばってほしいと思う。他は、子どもがすごく多く、ほとんどの展示が子供をターゲットにして

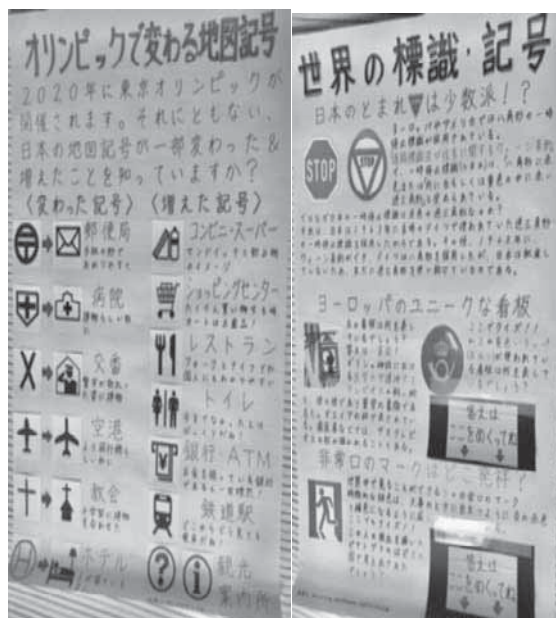
いるので、他と差をつけるなら、大人や親をターゲットにするのもいいなと思う。差をつける点では景品などもほとんど似たようなお菓子だから、景品でもできる。また、3階では、日本文化が楽しめるコーナーであったが、先生曰く人が毎年大勢いるので、やはり外国の方は日本の文化を体験したいというインサイトはあると思う。

(D) この課題探求プロジェクトを通して、初めて国際交流フェスティバルに参加する人もいると思うので、当日の様子などをアンケートなどでデータに残しておくといよい。人手不足に備えて当日のボランティアは早いうちから声をかけておくといよいと思う。今年は前日準備で展示した際、思ったより殺風景だったので、来年はもっと具体的に飾り付けや案内のポスターなど考えて準備しておくといよいと思う。

(E) まず国際フェスの準備は、自分が思っているよりはやく終わらせられるよう取りかかるべきであること。私が国際フェスの福井大学スペースを見た第一印象は殺風景だったことである。展示の配置の問題でもあったのだが、問題は準備期間にもあったと思う。私の代はどの班も後期に入ってから展示物の制作に本格的に取りかかったが、夏休みの長い期間をもっと活用して早い段階からある程度展示を完成させていれば、クオリティやそのほかの会場の華やかさを向上させること、展示どうしの統一感を高めることなどに時間をかけることが出来たと思った。それぞれの班の展示だけで精一杯で、他の班を気にはしていたが、同じ部屋をよりよく作り上げるために何かすることはなかったので少し後悔している。

次に自分達の展示のテーマや目的を何度も確認し、見直すこと。私の展示ははじめに決めたテーマや目的からずれているところがあることが、当日の反応を見て感じたので、自分が国際フェスを通して何を伝えたいのか、そのためにすべきことを再考することを、準備と同時進行で繰り返したほうが良い展示に繋がると思った。

(F) 部会ではどの部会に行っても大学生は意見を求められるような印象を受けた。また、今回は5つの部会のうち2つを大学生が部会長を務めたが、貴重な経験になるので積極的にやってみてほしい。



3. 課題探求プロジェクトの成果

今回の「課題探求プロジェクト I」では、13名の受講生たちが2つのグループに分かれ、「世界に福井があふれつた（福井の魅力をアピール）」、および「在日外国人が抱える問題」というテーマ設定のもとで、さまざまな調査結果をおこない、体験型の催しや展示物の作成に取り組んだ。国際交流会館での活動は、福井県国際交流協会の職員やボランティアの市民の方々との協働のなかで、さまざまな困難に直面しながらも、国際的な催事を実現させる経験になった。主催者側の関係者や地域の方々との交渉したり、協働したりする過程は、地域社会を知る良い機会にもなった。また、受講生はフェスティバルの場で展示物を来客に提供する役割も果たしたため、その反応をじかに確かめる

とともに、外国人や地域の子どもたちとのコミュニケーションの機会に恵まれた。ここでの経験は、後続する「課題探求プロジェクト」や、留学、卒業研究、就職活動といった受講生の以後の活動に役立つと考えられる。

4. 総括・反省

企画運営委員の一員として企画を進めたり、調整役をつとめたりする活動は、大学の外で社会人とともに責任を担う経験である。受講生の報告から、各々が展示の製作と並行し、困難に立ち向かった様子をうかがうことができ、その点は高く評価できる。

展示については、催事としての楽しさという点と授業としての課題探求という点をいかに融合させるかといった点で困難を感じた受講生が多かったようである。また、当日の会場では、来客への対応や展示の仕方にも反省すべき点が認められる。国際色と地域色を融合させるような課題を発見し、調査や展示を効果的に発信する工夫は、今後も必要となるだろう。

課題探求プロジェクトⅢA(3年次前期:グローバルアプローチ)

平成30年度の取り組み

映画の自主上映会の企画・開催を通じた地域振興の取り組み —福井市中央公園における『ローマの休日』野外上映会の実施—

1. プロジェクトの趣旨

闇に包まれた空間で多くの人が共に古今東西の映像作品を鑑賞できる映画館は、かつて地域の文化発信の拠点としての役割を担っていた。しかし近年、DVD やブルーレイなどの簡易で高性能なソフトや各種 AVL 機器の発達に伴い、映画館に足を運ぶ人の数が大幅に減少している。その一方で、国際映画祭を催すまでに至った夕張市をはじめとして青梅市や盛岡市など、地方自治体が映画による地域振興に取り組むケースが、昨今では珍しくない。また、往年の名画や商業ベースに乗りにくい作品の自主上映・企画上映が有志団体の主催で行われるケースも、各地で増えてきている。加えて、大学でも近年、映画の上映会を通じて多文化理解を深める取り組みが行われ、映像文化による地域振興のあり方が学問的な研究対象になりつつある点も注目される。

デジタル化に伴う映像テクノロジーの飛躍的な進歩に伴い、映画館での上映に使用されるフィルムや映写機を用いずとも、DVD あるいはブルーレイ・ソフトと高性能のプロジェクター及びスクリーン、それに映画館に匹敵する暗闇の空間さえ確保できれば、映画は成立する。本プロジェクトは、こうした考え方にに基づき、県内外の自主上映サポート機関と連携しながら、上映作品、上映会場、料金等を合議の上で決定し、上映会を成功に導くことで映画による地域振興の端緒を開く取り組みである。

2. プロジェクトの概要(COC+「Monthly Letter」からの転載)

福井大学国際地域学部の基幹科目である「課題探求プロジェクト」の取り組みの一環として企画された『ローマの休日』野外上映会が、7月22日に福井市中央公園において実施された。COC+の県内5大学連携事業としての役割をも担った今回の上映会は、4ヶ月弱という限られた時間の中で計画・準備されたため、不行き届きの点や反省点も少なからずあったが、なんとかイベントとしての形を整えることができ、当初の想定以上の好評が得られた。学内関係者で完結してしまうのではないかと、イベント自体の魅力に欠けるのではないかと、などといった不安も、参加してくださった方の温かいお言葉のおかげで、満足感と達成感に変わり、それらが今も心地よく胸に残っている。また、福井大学工学部明石研究

室の協力を得て設置されたイルミネーションの彩りが『ローマの休日』の上品な雰囲気とうまく合致していたのも印象的だった。

現在では体験する機会の少なくなった野外上映会を福井市民の憩いの場として再整備されたばかりの中央公園で実施することができた意義は大きいと言える。夏の夜空の下で名作映画を鑑賞できたことは、主催者と参加者の双方にとって貴重な経験となったに違いない。大学に求められている「地域との繋がり」を推進してゆく上でも、このようなイベントの開催は有効な手段となり得るだろう。可能であれば今後も何かしらの形で今回のようなイベントの企画・実施に関わってゆきたいと考えている。

(福井大学国際地域学部3年 織田賢祐)

国際地域学部の1期生のひとりである織田賢祐君が2月に急逝されたことは、本学部の学生・教職員にとって痛恨の極みでした。本プロジェクトでリーダー的な役割を務め、新聞社の取材への対応から物品の運搬に至るまで、責任感をもってさまざまな作業に取り組んでくれた在りし日の織田君を偲びつつ、COC+（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）の「Monthly Letter」に掲載された同君の報告文を以てプロジェクトの概要に代えさせていただきます。

3. 今年度の自主上映会(野外上映会)の仔細

- (1) 開催日時：7月22日（日） 19:00～
- (2) 上映形態：野外上映会＋イルミネーション（入場料無料）
*イルミネーションに用いたのは、福井大学工学研究科の明石行生教授の指導の下で同研究室の学生たちが作成した器材である。
- (3) 上映作品：『ローマの休日』（1953年：118分）
- (4) 作品配給：MMC（株）ムービーマネジメントカンパニー
- (5) 上映会場：福井市中央公園北側芝生広場
- (6) 機材調達：(有)スペース源内
- (7) 経費助成：COC+（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）

4. 授業の進行

4月	(18日) クラス分け⇒オリエンテーション ・自主上映会の実施に関する諸課題の確認 ・今後の（前期授業期間中の）スケジュールの確認 ・短編映画の鑑賞（岩井俊二『四月物語』）
----	---

5 月	<p>(2日) 自主上映作品及び配給会社の選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主上映作品配給会社4社が擁する約220の上映可能作品の吟味 ・4社それぞれの価格設定や配給の仕組みに関する理解の醸成 ・短編映画の鑑賞(ルイ・マル『影を殺した男』) <p>(16日、30日) 自主上映作品の絞り込み及び上映会の開催日時・場所の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生を対象とするアンケート調査の結果を基にした作品の絞り込み ・自主上映会の開催日は7月22日に決定 ・短編映画の鑑賞(アルベール・ラモリス『赤い風船』)
6 月	<p>(6日、13日、20日) 二つの自主上映候補作品及びその上映形態に関する検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウィリアム・ワイラー『ローマの休日』の野外上映/トム・フーパー『リリーのすべて』の室内上映: 配給価格や作品の性格等を踏まえて慎重に検討した結果、前者に決定 ・上映会場に関する検討: 福井市役所との折衝を経て福井市中央公園に決定 ・機材調達に関する検討: 県内外の複数の業者との交渉を経て機材調達先を決定(スクリーンのサイズが決め手となる) ・20日より広報・宣伝活動のあり方に関する検討を本格化(ポスター・チラシ, 福井新聞社, Twitter等を通じて実施) ・雨天・荒天時の対応に関する検討(その場合、上映会場をFスクエアに変更することを決定) ・自主上映作品『ローマの休日』の鑑賞
7 月	<p>(4日) 野外上映会の+α企画として、工学部建築・都市環境工学科の明石研究室の協力を得てイルミネーションの点灯を行うことで合意</p> <ul style="list-style-type: none"> ・照明器具及びオブジェの借り受け及びオブジェの追加制作 <p>(11日) 広報・宣伝活動の強化及びイベント当日の式次第と役割分担に関する検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広報・宣伝活動の現状の確認(県内大学連携事業としての側面を考慮する) ・福井新聞の取材日の決定 ・福井市役所との折衝及び上映会場の視察 <p>(18日) イベント当日の段取りの確認及び来場者に対するアンケートの策定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・熱中症対策のマニュアルの確認 <p>(22日) 野外上映会の実施</p>
8 月	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの集計と分析及びそれを踏まえた振り返り ・レポート(実施報告書)の提出

5. 野外上映会開催に係る活動内容とその成果及び反省点

板谷月紀、織田賢祐、仲野真紀、西郡優季、西澤隆希、舟津香菜子、村中陽香、米原杏奈

(1) 上映作品・上映日・会場の選定及び機材調達の検討について

① 活動(検討)内容

- 最初に、上映会の目的、作品の選択、日時・会場の設定、宣伝方法を主に考えた。上映会の目的は映画による地域振興の端緒を開くことと考え、学生だけでなく、いかに地域の人々がこのイベントに参加してくれるかが重要になった。作品を選択する際、当初は社会問題を孕む作品を選択し、プラス・アルファの企画として講師を呼んで講演を行ってもらうことなどを予定していたが、果たしてそれで多数のイベント参加者が見込めるかどうか不安があったため、第一回のイベントでもあったこともあり、広く知れ渡る名作を野外で上映し、プラス・アルファの企画としてイルミネーションで会場を飾ることを考えた。日時の設定についてはイベント開催側である自分たちの留学の時期や、野外でのイベントのため雨は避けたいということから梅雨明けを念頭に置き、7月22日(日)と決めた。会場は駅からも比較的近く、公共交通機関でも、自家用車でもアクセスし易い場所で、且つ芝生がある福井市中央公園を会場場所にしたことは良かった点である。また、それぞれが当日までに宣伝担当、福井市役所への協力を依頼する担当、新聞取材担当、イルミネーション担当等役割分担を決め、各自が責任を持って行動した。
- 上映作品の選定段階では、この企画が教育の一環として行われる以上、政治問題、LGBT、人種差別、教育問題などの社会問題に関わるテーマを扱った方がいいのではという議論がなされた。しかし話し合いの結果、会場の選定や企画に合う映画を選ぶべきだという結論に至ったため、まず企画を野外上映とし、会場を福井市中央公園と決めた。そのうえで、野外で星空のもと、夜風に吹かれながら観る映画にふさわしいものとして、『ローマの休日』を選定した。機材の調達に関しては業者に頼み、イルミネーションの一部は自分たちで手作りし、一部は福井大学工学部の明石研究室からイベントに使われていたものを借りた。
- 上映の映画として『ローマの休日』を選んだ理由としては、①映画としての知名度が高く集客しやすいこと、②比較的若い世代でも見たことがない人も少なくないこと(特に学生層)、③鮮明な映像が投影できないシチュエーションにおいて白黒映像がむしろいい雰囲気を醸し出すであろうこと、以上3点である。上映会場の選定においては第一に交通の便が良いかどうかを念頭にいくつかの候補を挙げ検討した。中央公園を会場として選んだ理由は、課題探求プロジェクトの「地域の活動に学生が入り、活性化を目指す」という基本理念に中央公園は合致していると考えた

からである。というのも、中央公園は福井市街の中心に位置し、文化活動の中心としての利用を目的として整備された公園だからである。当日の機材等を自分たちで設置するか、それとも業者に依頼するか議論したが、機材知識の乏しい自分たちには難しいと考え、業者に依頼することとした。

- 上映作品の選定については、野外上映を行うということや対象とする年代等を踏まえた上で、名画である『ローマの休日』を上映することに決定した。実際に上映会を開催すると、多くの年配の方々の参加があり、誰もが知る『ローマの休日』を上映作品として選んだことは正しい判断であったのではないかと強く感じた。また、夏の野外上映会という企画であったため、夜の涼しい風に当たりながら星空の下で名画を観るという点で満足度の高いものになったと感じた。
- 当日の機材調達については、種々の機材のほか、大きなスクリーンを借りることができる業者に依頼した。設置場所やイルミネーションの装飾の方法など、いろいろなアドバイスをその業者から受けることができた。そのため、イルミネーションの設置も含めて、当日の準備は比較的スムーズに行えたのではないと思う。
- 上映作品の選定については、MMCなどの自主上映のための映画レンタル会社の作品ラインナップから、今回の自主上映会にふさわしいと思う映画を選考した。映画選定の当初は、野外ではなく、屋内で上映して、映画の内容についてのディスカッションや、映画の時代背景に関する講演会をしようと考えていたため、アニメやアクション映画などは、上映会にあまりふさわしくないのではないかと考え、候補からは外した。しかし、自主上映会をするのなら、多くの人に参加してもらいたいと考え、それならば、ディスカッションや講演会よりは、もっと気軽に楽しんでもらえて、参加しやすい上映会にするべきではないかと考えた。そして、地域の人にも参加してもらうには、野外で上映するのが良いのではないかと考え、野外で上映会をすることに決まった。そこで、上映する映画を決める際、野外上映にふさわしい映画とは何かと考えた。そこで決まったのは『ローマの休日』という作品であるが、この選択はよかったと思う。静かでロマンチックなストーリーが、夏の野外上映の雰囲気合っていたと思う。

②得られた知識・経験

- 結局選ばれなかったが、シネクラブ方式を導入することで、上映会が単発的な映画鑑賞の場にとどまらず、多文化理解の実践の場となることが期待できること、またカフェ・コンセル方式を導入することで上映会を地域に開けた文化交流の場へと発展させることが期待できたこと、というのは知らなかった知識であり、このような方式を取れば、より地域に向けた取り組みができるということを学んだ。
- 映画の選定や企画の決定において、自分たちがやりたいことと十分な集客数を獲得することを同時に成功させることは、自分たちが思っているよりも難しいということ

とを知った。企画を成功させるには十分な集客が必要だが、十分な集客を得るには魅力的な企画が必要であり、自分たちがやりたいこと、あるいは目的としていることを魅力的な企画として形にすることは簡単ではなかった。そのため、それらを両立させてバランスよく企画するということに難しさを感じた。今回は、野外上映という天候にも左右されうる企画ではあったが、野外でイルミネーションに囲まれ、モノクロのロマンス映画を観る、という状況は十分に魅力的な企画として成り立っていたと思うし、来場者は映画自体だけではなく、そういった「雰囲気」を楽しんだ人も多かったのではないかと思う。

- 自分たちで映画を選定する際、ただ自分たちの観たいものを最初は選んでいたが、それはただの個人の興味の範囲でしかなく、どのような作品だったら集客できるか、関心を引くことができるかということ念頭に置いたら、映画を選ぶ視点が変わったのでよい経験になった。上映日の検討については、今回は我々運営側の都合に従って決めざるをえなかったが、集客や上映時期の天候、会場の状況など様々な視点から検討しなければならないことに気づかされた。特に天候については、野外上映は天候に左右されることもあり、当日の天気から、梅雨明けの時期、風の強さ、日の入りの時間など、想定していなければならない要素が多くあり、事前の念入りな調査が必要だということがわかった。機材調達に関しても、どこからどこまでが自分たちでできるのか、どこの会社を利用したら費用を抑えられるか、など事前の下調べが重要であることもわかった。
- この経験から、新しい映画を上映するよりも多くの人を知る昔の作品や名画を扱って上映する方が、様々な年代の方や特に年配の方々の参加が見込まれることを学んだ。
- このような活動を通して、自主上映会の大変さが分かった。まず、どのような目的でその映画を上映するのかなど、コンセプトを固めることが非常に難しかった。また、自主上映会についてあまり知識がなかったため、業務用 DVD を貸し出す専用の会社があるというのも初めて知った。
- これらを決めるにおいて、まずかかる費用の調査、予算を立てることが非常に重要だと感じた。私たち学生の中で自主上映会に詳しい者はいなかったため、上映会用の DVD のレンタル料や会場を借りる金額などに関してまったく想像がつかなかった。映画 DVD のレンタル料金はどの作品でもほぼ一定であるが、もしハピリンやアオッサの一室を借りることになっていたら、費用がかさむことになるので、おおよその予算のラインをあらかじめ決めておくべきだと感じた。

③反省点(今後の課題)

- 上映作品を決める際にテーマを先に決めてから作品を選定していたら、上映作品を決める時間を少しでも減らせたのではないだろうか。一番重要なことはテーマに沿

った作品を上映し、何を観客に訴えるかである。まず、軸をしっかりとさせ、可能な限り早く上映作品を決定し、プラス・アルファの企画により多くの時間をかけるべきだったのではないかと考える。

- 映画の選定、企画・会場の決定がなかなかできず、実際に急いで準備する形になったことは反省すべき点だと感じた。また、会場のリサーチが不十分で、雨天の場合等の計画がかなり杜撰だったことも改善すべきであると思う。
- 反省点はあらゆる要素を事前に予想し、早めに対策を立てておくことができなかった点である。今後の課題は、アンケートにもあったように、継続する企画として見たとき、毎回外部に機材などを委託することは現実的とは言えないということである。また、会場も毎回変更するのかなど、持続性という観点から見たときに課題が次々に出てくるように思う。
- まず、映画の上映作品の選定に少々時間がかかりすぎたように感じる。というのも、そもそも当初は屋内で上映することを想定しており、付加価値としてその映画に関する講義や座談会を考えていたため、自ずと映画も話題性があり、なおかつ社会問題を含んでいるものを選ばなければならないと考えていた。社会問題を扱った映画が来場者に魅力的に映るのかどうか、また付加価値として何を企画するか2点において頭を悩ませた。途中から付加価値を「野外上映」にしたほうがイベントとして面白く、行ってみたいと思わせることができるのではないかと考え、「野外上映会」に合わせて映画を選定できたことは、結果からすればよかったのかもしれない。
- 反省点としては、上映作品の選定に時間がかかり、宣伝活動の時間が少なくなってしまったことである。最初からイベントの内容を決め、野外で行うことを決めておけば、上映作品選びも、もっとスムーズに進められたのではないと思われる。
- 反省点としては、上映作品の選定に時間がかかったため、宣伝・広報活動や、イルミネーションの作成などの準備に十分な時間をとることができなかった点である。もっとタイムマネジメントをしっかりと行い、計画をもっと綿密に立てればよかったのではないかと感じた。

(2) 宣伝・広報活動について

① 活動(検討)内容

- ポスターを福井大学だけでなく、COC+に参加している大学の構内や、COC+の本部であるアオッサのFスクエアに貼り、また協力を依頼した福井市役所内や福井市役所が管理するビジターセンターにもポスターの掲示を依頼した。また、情報を共有し合うことのできるSNS(Twitter)を宣伝・広報活動に取り入れた。Twitterを選んだ理由としては、比較的大人から子供までの利用者が多く、宣伝効果が得られると考えたからである。そして、福井新聞社にも取材を依頼し、イベントの簡単な内容や開催場所を宣伝した。

- 宣伝は主に新聞、ポスター、および Twitter を利用した。新聞は、インタビューを受け、写真付きの記事となった。Twitter は、「福井市『ローマの休日』上映会」というアカウントをつくり、日時、場所等の情報発信をしたり、当日の準備の様子を載せ、上映会後も結果の報告などをした。
- ポスター制作に関しては、デザインの異なる 2 種類を制作した。必要な情報は簡潔にまとめ、見た人の目を引くポスターにしようと考え制作した。キャッチコピーとして『イルミネーションと楽しむ、今日だけの特別な映画館』というフレーズをポスターに入れたことも工夫した点である。上映会の後感じたことは、椅子などの持参もポスターやチラシで呼びかけると良かったのではないかと感じた。
- ポスター制作は 4 人で担当した。映画をレンタルした MMC からポスター用に使ってもよい画像をもらい、今までに行われてきた映画上映会やコンサートなどのチラシを参考にしながら、どのような情報を載せなければならないのかをまとめ、見やすいように文章やレイアウトを考えた。これらのポスターは、福井県内のいくつかの大学（福井大学、福井県立大学、仁愛大学、敦賀市立看護大学）の掲示板や、市役所、アオッサの F スクエア、福井駅前にある映画館テアトルサンクにもポスターの貼付を依頼した。新聞では、イベントについてのインタビューを受け、上映会の宣伝をした。SNS では、イベントの情報を流し、拡散機能を通して出来るだけ多くの人の目に触れるよう努めた。
- SNS を利用した宣伝・広報では、Twitter を利用することになった。アカウントとして「福井市『ローマの休日』上映会 (@fukui_joeikai)」を作成し、国際地域学部の多くの学生にアカウントのフォローとツイートの拡散を手伝ってもらった。発信した内容は、イベントの告知、注意事項や当日の設営の様子などである。

②得られた知識・経験

- SNS が最も有効だと思っていたが、野外上映会後のアンケート調査の「この企画をどこで知ったか？」という質問で、SNS と回答した人は 38 人中 2 人と、項目の中でも最下位であることが分かった。SNS は仲間内での盛り上がりが目立ち、その様子を目にした学外の人疎外感を抱き、イベントに参加しづらい気持ちになったのではないかと推測した。一方で、新聞と回答した人が 15 人と最も多く、古典的なメディア媒体の集客効果を改めて実感した。
- 今回の宣伝活動において、全体に新聞が最も効果的であった。やはり上の世代には新聞による宣伝が効き目があるのだと感じた。またポスターについては、映画館など映画好きの人たちが集まる場所に貼ることはかなり効果的で、的を絞った宣伝の仕方としてとてもよかったのではないと思う。ポスターでの宣伝で大切なのは、興味を持ってくれそうな人たちが行きそうな場所をターゲットにして広報することだと思うので、次回は、そういった場所をもっとリサーチして、宣伝すればもっ

と良くなるのではないだろうか。

- ポスターの効果的な作り方や各箇所へのポスター掲示の依頼など、ポスターの広報活動を通じて学ぶべき点は多く、有益な経験となったと思う。
- 今回の宣伝・広報活動を通して、幅広い年代の人々の集客を狙う場合は、SNS より紙媒体での宣伝の方が効果的であるということを知った。より早い段階で宣伝活動を開始していれば、さらに多くの人々に楽しんでもらえたのではないかと思う。そして、今回はテレビを通じての宣伝活動は行わなかったが、テレビでの宣伝も行っていたら、上映会のことを知り、参加しようとする人が増えていたかもしれないと感じた。
- アンケートによると、ほとんどの人が新聞でこのイベントを知ったという回答であり、SNS の効果は自分の予想を下回る結果となった。しかし、SNS の運用には可能性があると思う。ポスターや新聞などで発信した情報と違って、SNS は随時更新できたり、より細かな情報が発信できるのが魅力である。もし、SNS の発信力が新聞やポスター、口コミを上回る事ができたなら、来場者にも運営者にも非常に便利な環境になる。今回はうまくいかなかったが、もっと SNS を広報に活用できるはずだと思う。

③反省点(今後の課題)

- どの世代も手に取りやすいのは、新聞やテレビといったメディア媒体であるということが判明した。よって、今回行わなかったテレビによる宣伝・広報活動も視野に入れて活動すると、より多くの集客が見込めるのではないだろうか。また、チラシをより多くの場所に置くことも一つの手段である。例えば、福井市内の様々な店舗では、多くの会社（英会話スクールやイベントのチラシ）のチラシが店頭においてあり、自由に手に取れるようになっている。今回は許可が取れなかったため、店頭には置くことはできなかったが、もしできていたら、より良い効果が見込めたのではないかと思う。また、ポスターについても、いかに目につく場所に掲示するかが鍵となってくる。また、SNS をより有効に利用しようとするなら、もっと早い段階から開始すること、また、開始後は毎日投稿することが重要である。今回の場合はイベントの3週間前から投稿し始め、大体1週間に1回の投稿のペースだったため、やはりもっと頻繁に投稿する必要があると考えられる。
- Twitter での宣伝は、同世代への宣伝効果しか見込めなかったこと、また、企画自体の内容・日時・場所を決めるのが遅かったため、Twitter のアカウントを拡散する時間が少なく、フォロワー数もあまり獲得できなかったことが反省点である。テレビを通して宣伝する方法も挙げたが、時間がなかったことや出演を引き受ける人がいなかったため、実現しなかった。十分な時間と余裕があれば、テレビを通して宣伝することでもっと多くの集客を見込めたのではないかと思う。

- もう少し、広報自体を早くから始めることができればよかった。実際に始めたのは、上映日の2週間前のことで、その結果、SNSにおける集客の効果は薄かったことが分かった。また、ポスター掲示も、事前にしっかりと準備をして、計画的に分担してもっと多くの場所に掲載することができればよかった。また、ポスターやSNSに問い合わせ先を書いておけばよかったと感じている。ポスターやSNSでの宣伝では、当然必要な情報は伝えなくてはならないのだから、その点は反省しなくてはならない。
- 宣伝活動は大いに課題の残る結果となったと言える。今回宣伝方法として実施したのは新聞、SNS、ポスター、チラシの4種であったが、一番手間がかからず効果的だと考えていたSNSは目立った効果はなかった。イベントに関する情報をインターネット上に掲載する頻度も、使用するシステムの数も広報としては少なかったと反省している。アンケートの集計結果からすると、新聞に掲載されたイベントの記事を見て来場した人の割合が多かったため、同様なメディアとしてテレビ広告も導入していればさらなる集客も見込めたはずだ。
- 作成したチラシがあまり使われなかったのは、事前の検討不足だった。できれば学生のアルバイト先や周辺店舗に設置したかったが、実現しなかった。イベント当日に気がついたことだが、中央公園のすぐ横にあるホテルフジタに依頼して、フロントにイベントのチラシを置くことができているならば、宣伝として効果があったのではないだろうか。というのも、ホテルに宿泊する人には、時間に余裕があれば、『ローマの休日』を夏の夜空の下で鑑賞するというシチュエーションは魅力的に映るだろうと個人的に感じたからである。
- 今回の上映会の日時が決定してから本番までの間に十分な宣伝期間がなかったことは第一に反省点としてあげられると考える。今回はポスター・チラシづくりに加えて、Twitterのアカウントの作成による宣伝、そして新聞での宣伝を行った。上映会のアンケート結果から分かるように、新聞でこの企画を知ったという人が多かった。反省点としては、ポスターやチラシをもっと早くから掲示、配布すべきだったのではないかという点と、より広範囲に、多くの場所に掲示、配布して宣伝することが出来ていたら、さらなる集客も可能だったのではないかという点である。また、自分たちの予想に反してSNSでの集客が不十分であったように感じた。
- 宣伝広報については、宣伝・広報のために時間が少なかったということが反省点としてあげられる。上映作品やイベントの内容を決めるまでに時間がかかったため、ポスターなどの広報活動の時間があまり取れない結果になったと思う。そして、宣伝・広報する手段をもっと増やすべきだった。新聞の宣伝効果が非常に大きかったということがアンケートからわかったので、新聞折込みとしてチラシを配れば、もっと宣伝効果が大きかったのではないかと後で思いついた。この宣伝方法も一考の余地があるのではないかと思う。

- 宣伝・広報活動の中心場所は大学だったので、多くの大学生の参加を予想していたが、イベント当日は意外に大学外の人たちの参加が多かった。大学生は国際地域学部の学生がほとんどで、他学部の学生や他大学の学生はあまり来ていなかったと思われる。大学生にも多く来てもらうためには、宣伝・広報活動をもっと工夫するべきであった。Twitter のアカウントを作り、そこで情報を随時発信していこうと考えていたが、結局はあまり情報を発信することもなく終わってしまったのが反省点である。SNS は大学生のための宣伝・広報方法として最適だと思うので、SNS での宣伝にもっと力を入れるべきであった。野外上映会の公式の Twitter のアカウントで宣伝するのも良いと思うが、やはりアカウントを作るだけだとフォロワーが少ないので、その情報を見る人も少ない。それより、グループのメンバーの個人の Twitter やインスタグラムのアカウントの方が、もともとフォロワーが多くいるので、そちらで宣伝した方が効果が大きかったのではないかと思った。実際にイベントの当日に自分のインスタグラムに写真を投稿したところ、「それどこでやってるの?」、「こんなやつやってるんだ、行きたかった。」などとコメントして来てくれたので、イベントの前から、情報をのせておけばよかったと思った。
- 効果宣伝・広報活動の中での反省点としては、宣伝する期間が短く、ポスターを貼る場所は大学が多く、学生の目には入るが、一般の人の目に入りにくいという問題があったと考えられるため、ポスターを貼る良い場所の検討をもっとすれば良かったかと思う。また、SNS はもっと頻繁に更新し、準備風景などを載せたりすると人の目に触れる機会がより増えたのではないかと思った。
- 上映会を終えた後、もっと宣伝の効果的な方法があったのではないかと感じた。SNS のフォロワーは学生だけであり、やはり一般の方への周知が十分ではなかった。福井メトロや福井市内の関係各所のアカウントをフォローし、またそのフォロワーから一般の福井市民の人々をフォローするなど、今以上に積極的に存在を周知していかなければならないと実感した。

(3) 野外上映会当日の運営について

① 活動内容(役割分担)

- 当日は、学校からのイルミネーションなどの機材の運搬、イルミネーションの飾りつけ、後片付けを担当した。事前に市役所に行き、中央公園の電源ボックスの鍵を預かっていたこともあり、上映機材を設置する業者が会場に到着する前に会場に到着した。上映が始まってからは記録用の野外上映会の写真を撮ったり、熱中症の症状を訴えているような人がいないか目配りをしながら、イベント参加者と上映会を楽しんだ。
- 最初に、機材の設置場所を決め、業者が上映機材を設置している間に、イルミネーションの設置を行った。そして、ブルーシートを敷いて客席の確保やアンケートを

ボードに挟む作業などの細かい仕事も行った。参加者が集まり始めてからは、アンケートを配り、席への誘導をした。司会進行役として、日が落ちるまで少し開始を遅らせる旨のアナウンスや、国際地域学部の PBL、今回の企画、上映の映画についての大まかな説明を行った。映画が終わってからは閉会の挨拶をし、アンケートを回収し、片づけを行った。

- 野外上映会当日は、基本的にイルミネーションの設営の役割を担った。本番まで一度も実際の会場でイルミネーションの試しの設置を行わなかったため、イメージと一致した設営が出来るか不安であったが、意見を出し合ってイメージに近づけることが出来たように感じた。スクリーンからイルミネーションを吊すことができなかったが、周りの木を利用して、工夫しながら装飾した。
- 公園に植えられていた二本の木の間スクリーンが設置されたのだが、その二本の木を利用してイルミネーションを飾り付けた。結果、うまくいったのではないかと思う。それほどイルミネーションの色や光も邪魔にならず、映画の雰囲気とも合ったものにできたように思う。上映会に華やかさをもたらすことができた。
- 上映会当日は、まず会場に着くとスクリーンの設置から始まった。結果的には、当初スクリーンを置こうとしていた場所とは違う場所での設営となったが、風の向きも考慮に入れ、公園に植えられていた二本の木の間スクリーンを設置することができた。また、その二本の木を利用して、計画通りピンポン玉のイルミネーションを設置することが出来た。また、受付を担当し、来場者に対応した。

②得られた知識・経験

- 最初イルミネーションについては、上映中はスクリーンの周りのイルミネーションは消灯したほうが良いだろうと思っていたが、その必要はなく、点けたままでもそれほど明るすぎず、上映の邪魔にならなかったと思う。また、熱中症の対策を考えていたが、杞憂に終わり、結果的に良かったと思う。しかし、簡単ではあるが熱中症の症状の対応方法を学んだことは、この先、役に立つことがあるかもしれないと思った。
- 学生だけではない、一般の人たちがいる場で司会をしたことは、とても大きな経験になったと思う。日没を待つため開始時間を遅らせたのだが、その間学生は携帯電話などを弄って暇つぶしができるが、年配の参加者などはそういうわけにはいかないので、退屈させない、飽きさせない配慮がとても重要だということ学んだ。企画の全体的な結果としては、思っていた以上の集客があり、イルミネーションもいい雰囲気を演出してくれたので、大成功だったのではないかと思う。短い期間での計画・運営ではあったが、自分たちが企画したものへの一般の人々の参加もあり、また、良い思い出になったと言ってもらえたことも本当に嬉しかった。
- 当日になって、予想していなかった機材の操作やチェックなどの仕事が増えたのは

大変だったが、臨機応変に対応することも必要だということも身をもって知ることができた。また、イルミネーションの設置やスクリーンの設置、映画の上映など、当日その場で解決しなければならなかったことも多かったが、結果イベントを完了することができたのは良い経験になった。

- イルミネーションはきれいに光り、夜空と映画と共にとっても良い雰囲気を出していたのではないかと思う。広々とした会場で上映会を行っていたため、イルミネーションの飾り付けがあったことは野外上映のアクセントとなり、非常に良かったのではないかと考える。アンケートで様々な人からの意見を得ることができ、自分たちでは気づいていなかった視点からも今回の上映会を振り返ることができた。中には、直接感想を言ってくださる方やお礼を言ってくださる方もいて、この企画を行って良かったと思えた。事前には、国際地域学部の学生数人ほどしか来場者はいないのではないかと心配していたが、想像を遙かに超える人数(約 60 人)の参加があり、自分たちがイベントを企画して運営することの大変さと同時に喜びも知ることができた。限られた時間の中で準備を進め、企画することには困難を感じた面も多々あったが、少人数だからこそ意見を積極的に出し合って、結果的に成功させることができたのではないだろうか。
- 当日の運営については、事前にあまり話し合う機会がなく、ぶっつけ本番のような感じではあったが、その割に、役割分担も自然とでき、スムーズに準備や片付けができたと思う。
- 会場の雰囲気は、ピンポン玉のライトやシーグラス、ひもで作ったランプシェードなどでうまく演出できたと思う。当日の運営については、不慣れだったり、計画不足の部分もあったが、予想していたよりも多くの人々の来場があり、また、アンケートで「楽しかった」といった好意的な感想を記入してくれた人が何人かいたのがとても嬉しかった。このようにイベントを企画し実施することはとてもやりがいを感じられることだと強く思った。本当にこの上映会を開催し、成功させることが出来て良かったし、非常にいい経験になったと思った。
- 当日の会場の設営は順調に進み、開催時刻までに完了することができた。当日は天気は良かったが、すこし風があり、スクリーンに影響があるかと危ぶまれたが、その風のおかげで快適に鑑賞することができた。また、イルミネーションも想像以上に美しく、完全に日が落ちたころには非常にフォトジェニックな風景となった。

③反省点(今後の課題)

- 夏場ということもあり、開演時間が少し早かったと感じた。19 時開演を 19 時 30 分開演にしておけば、イベント参加者の待ち時間も少なく良かったのではないかと感じた。待ち時間の間や開演前の時間に音楽を流せば、待ち時間のストレスを少しでも解消できるのではないだろうか。また、アンケート回答の中で多かったのが、

参加者の誘導の問題である。この役割は決めておらず、参加者に自由に座ってもらうことを想定していたので、誘導することを事前に考えていなかった。イルミネーションの装飾に気を取られていたことも原因の一つである。想定していた装飾は、スクリーンの横の電球、シーグラス、間接照明、ヘリウム風船だったが、ヘリウム風船がうまく機能しなかった事が想定外であった。そして、受付の場所に問題があったのか、参加者の対応がうまくいかず、参加者全員にアンケートを渡すことができなかった。結局、正確な参加者の数を把握できなかったが、そこは把握する必要があることだったと反省した。

- ▶ 大きな反省点としては、やはり日の入りの時間が思ったよりも遅くお客さんを待たせてしまったことだと思う。またアンケートの意見欄に「スクリーンの向きを考慮する必要があるのではないか」という旨の指摘があったが、この点は次回に生かせる反省点であるし、機材の大きさや具体的な設置の仕方、また設置する場所の情報交換、及び確認も併せて考えなければならなかった課題点だといえる。また参加者の誘導がしっかりできていなかったり、宣伝の不十分からか、椅子を持ってきていない参加者が少し辛い思いをしていたところも反省すべき点であったと思う。簡易の椅子を用意するなど、次に生かせる改善点も少なからずあると思う。
- ▶ ぶっつけ本番で成功したからよかったものの、予想外のことなどに対する対応の鈍さが顕著だった。事前に機材を操作したり、現地に行って設置したりすることができなかったのは今後の課題だと感じる。本番が始まる前も、参加者を誘導する余裕がなく、参加者を当惑させてしまったのは大きな反省点である。事前に考えていたのは、アンケート配布時に案内をするというものだったが、アンケート配布が定位置で行われなかったこと、ほかのスタッフもイルミネーションの設置に追われていたことなどが重なり、予定通りに行けなかった。事前に予行演習をしておく必要性を感じた。また、当日は日の入りが遅く、結局 30 分近く参加者を待たせてしまったことも反省点の一つである。開始は、予定の 7 時ではなく、7 時 30 分でも良かったように思う。次回は、事前のシミュレーションはかならず行い、本番時に起こりえることを想定できるようにしておく必要があると感じた。また、持続性を考えるならば、外部委託などの費用面も含めて考えなければならない。
- ▶ イベント当日は準備に時間がかかると思い、4 時半ごろからイルミネーションの設営などに着手したものの、想定していた 6 時 30 分までに準備を終わらせることができなかった。原因はイルミネーションの一部として製作していた風船の中にヘリウムと電飾を入れたものだ。予定としては会場の周りにうまく配置し、立体的な空間を演出するつもりだった。しかし当日は風が強く風船が思ったように浮かばず、さらには芝生に接して割れてしまうとわかったため、結局断念した。この問題があったため、多くの生徒がその対応におわれ、早めの来場者への受付がおろそかになってしまったのは非常に残念なポイントだ。イベントは午後 7 時開始を予定してお

り、7時である程度暗くなると考えていたが、暗くならなかったため、結局7時30分まで上映を延期し、30分近く聴衆を待たせてしまったのは最も反省すべき点だった。イベントの開始時間を前もって7時30分に設定する必要もあったが、時間調整をするために、例えば『ローマの休日』にまつわる話（映画製作の背景など）をするなどして間を埋められたらよかった。機材設置の業者は、イベント中も待機し、設備の調整などをお願いできるのかと思っていたが、帰ってしまっていて、結局自分たちで何とかしなければならなかった。うまく乗り切れたから良かったが、不測の事態に備えて、事前にリハーサル等を行い、準備を十分にしておくべきだったと感じた。

- 当日の開始時間に関しては、予定の時間になってもなかなか日が暮れず、30分ほど開始時間を遅らせることとなった。その点は反省点であると考え。夏の日没の時間を考えて、もっと時間を遅らせるか、待ち時間にも退屈しないような工夫をすることができたら良かったのではと考える。また、映画上映前の待ち時間に音楽を流しておくことができれば、雰囲気も良くなり、より野外上映会として良いものになったのではないかと感じた。
- 当日に作らなければいけない装飾用のオブジェが多くあったため、開場時間になっても完全に作業が終わっていなかったことが反省点としてあげられる。また、風船を飾る予定であったが、想定外の風等の原因で破裂してしまうことがわかり、風船を飾ることができなかったことも反省点である。当日は早めに集合して比較的スムーズに準備を進められたのではないと思うが、19時前の来場者に対して的確な誘導や案内が出来ていなかったように思う。受付係も決めてはいたが、会場が広く、様々な方向から参加者がやって来たため、一つの場所で受付や案内をすることができなかった。そのため、どこに座れば良いかわからず困惑していた参加者もいたことも反省すべき点であると感じた。これは今後の課題として記憶しておくべき問題であると考え。
- まず、野外上映会当日までにイルミネーションの設置のシミュレーションをしていなかったことが反省点である。そのため、公園の風の強さや、風船の風や芝生への耐性について知らなかったのが、当日、風船が思うように浮かばなかったり、破裂してしまったりなどのハプニングに対処できなかった。事前に現地で試していれば、わかったことだと思うので、そうすべきだった。また、開演時間の設定についても、事前に現地に行けば、日没の時間がわかり、7時では開始時間が早すぎるのがわかったはずなので、そこも反省点である。そして、開始時間を遅らせたため、参加者を待たせることになったのだが、その間の工夫も必要だった。事前の話し合いで、始まるまでの時間に音楽を流してはという意見も出たが、著作権の問題などもあり、結局音楽を流さないことにした。しかし、そうすべきだったと感じた。参加者も、7時に集まって、その後30分も何もすることがなく、ただ座って待つ

てただけで、気まずい雰囲気になったように感じた。音楽を流していれば、少しは雰囲気も良くなっていたのではないかと思う。

- ▶ アンケートには、スクリーン横のイルミネーションが眩しかったという意見があったが、ピンポン球に入れた LED ライトが白色系のものだったため、少し眩しいと感じたのかもしれない。黄色系のライトを使えば、優しい光で眩しさも軽減できたと考えられる。
- ▶ 反省点としては、来場者が会場に入ってくる方向が様々で、1か所の受付ではうまく対処ができなかったことである。結果、受付を通してではなく、直接一人一人にアンケートを渡すことになった。また、思っていたよりも風船のイルミネーションを作るのに時間がかかってしまい、開演時間に間に合わず、参加者への十分な対応をすることが出来なかった。そして、日没時間の関係で上映会開始を 30 分遅らせたが、その間にすることがなかったため、無駄な時間を作ってしまった。空き時間のために、音楽を流したりするなど工夫が出来ればよかった。不測の事態が起こった時のために、すぐに対応が出来るように、どのような状況になり得るかあらかじめ考え、対策を準備しておく必要があると思った。
- ▶ 反省として、まず日が落ちる時間に関しての読み間違いである。私たちが第一に考えたのは「終了時刻」であり（開催日が日曜日であったため）、そこから逆算して上映開始時刻を決めた。結果、7時の開始時刻では明るすぎて、映像がスクリーンに映らず、来場者を待たせることになった。次に、案内に関する反省点である。設営自体は終わっていたが、細かな作業があったり、話しかけてきた人への対応をしたりと、余裕がなく、来場者への席の案内を十分にできなかった。また、事前に席に関する説明をしていなかったのも、椅子などの持ち込みなどの情報を事前に伝えておけば良かったと感じた。イルミネーションは非常に美しく、雰囲気作りがうまくできたと感じたが、明るすぎるという意見もあり、映画の観賞と会場自体の見栄えのどちらが大切であるのかをもう一度よく考えたい。風船が使えないなどのハプニングがあったが、そういったときに、すぐにそれを止めるという判断ができれば良いと感じた。自分たちにとっては大事な企画であるが、来場者にとっては数あるイベントの中の一つであるということ意識して、自分たちが考えた大事な企画であっても、無理だと感じたら、すぐに切り捨てられることも重要だと思う。

6. アンケート結果

【参加者(アンケート協力者)性別】 男性 17 人 女性 21 人 (当日の来場者は、約 60 名)

【年齢】 ~10代 1人（男性0・女性1） 20代 14人（男性5・女性9）
 30代 4人（男性2・女性2） 40代 8人（男性5・女性3）
 50代 6人（男性3・女性3） 60代 2人（男性1・女性1）
 70代~ 3人（男性1・女性2）

【今回の上映会はいかがでしたか？】

1. とてもよかった 22人
2. よかった 11人
3. あまりよくなかった 0人
4. よくなかった 0人
5. 無回答 5人

【イルミネーションはいかがでしたか？】

1. とてもよかった 19人
2. よかった 16人
3. あまりよくなかった 1人
4. よくなかった 0人
5. 無回答 2人

【この企画をどちらでお知りになりましたか？】

1. ポスター 7人
2. SNS 2人
3. 新聞 15人
4. 口コミ 9人
5. その他 ・ともだち(2人) ・TV ・学内の連絡
6. 無回答 1人

【また同様の企画があれば参加したいですか？】

1. はい 35人
2. いいえ 0人
3. 無回答 3人

【ご意見・ご感想】

- ・広報をもう少し工夫するといいのにと思いました。イルミもきれいで、すずしくて夏の夜外で映画いいなあとと思いました。(20代女性)
- ・どうしてこの映画を上映したのか、どんな映画なのか説明があると良かった。(20代女性)
- ・明るさと開演時間の設定は下調べが必要だと思いました。(50代女性)
- ・Really great(^-^)お疲れさまでした。(20代女性)
- ・次はイスを持参します。(40代女性)
- ・スクリーンが小さい。スクリーンが低い位置であった。もう少し高くしないと人の頭で見えない。(50代女性)

- ・ローマの休日初めて見ました。ほかの映画でもまたやってほしいです。ありがとうございました。(10代女性)
- ・情報(詳細)が新聞に載っていないため、ネットでも検索できるようアドレスを載せておくと良いのでは。(TEL はしにくいと思います。)待ち時間にせめて音楽を流すなど楽しめる工夫があると良い。夕涼みにちょうどよい涼しさでお天気で最高でした。子供が見たいと一緒に来ましたが、久しぶりに見てもステキでした。ありがとうございました。(40代女性)
- ・画面横のイルミネーションはちょっとまぶしかったです。(60代女性)
- ・新聞でこの企画を知りました。国際地域学部1年生の母です。今日は仕事が休みだったので参加しました。ありがとうございました。(40代女性)
- ・イルミネーションがキラキラして幻想的でした。特にピンポン玉のやつ。最後まで映画は見れなかったけど始まるまでの待ち時間の間、小さめでも音楽を流しておいたり、一般の人も座って待てる席をあらかじめ案内しておくともっとよくなると思います!夏のいい思い出になった!(20代女性)
- ・今ここに来ていることが大変よかったです。いつもの生活と違ったひと時を大変うれしかったです。又、機会があったら来たいと思います。(70代~女性)
- ・夏の夜にふさわしい映画を選ばれたと思います。宣伝がいま一つだったかとも思います。もっとたくさんの人に来てほしかった。楽しい一時をありがとうございました。(70代~女性)
- ・名作が観れてよかった。姿勢がきつかったので事前に設備を教えてくれたら尚良しかったです。(20代女性)
- ・夏空の下、公園で城跡を横にすてきな時間でした。星に見立てたイルミネーションも心地よく可憐でした。夜は比較的涼しくつきもきれい。ローマの休日いい。うん、とても良い。お酒飲みたくなりました。福井にこんな文化いいですね。このような企画、開催ありがとうございます。素敵な企画もっとたくさんの人に知ってもらいたい。今年の夏の思い出になりました。暗く、字が汚くきちんと書けない。ごめんなさい。大学生の皆さん、本当にありがとうございます。お疲れさまでした。(30代女性)
- ・次回も期待しています。面白かった!楽しかったです。(30代女性)
- ・普通の映画館では味わえないような空間を作り出して楽しめた。(20代男性)
- ・天候にも恵まれて良かったです。(40代男性)
- ・夜空、月、イルミネーション、さわやかな風、とてもいい雰囲気で楽しめました。また期待しています。(40代男性)
- ・企画は楽しく、良いと思います。暗室効果を出すには、イルミネーションは無いほうが良いと思います。後、少しでも早く投影するなら、スクリーンを「東」に向けるべきです。「西」ではなかなか暗くなりません。'60~'70s モノで続けてほしいです。(40代男性)

・19時から上映とのことで早めに行ったが、準備に追われてて、座ってよいのか案内もなくわかりませんでした。暗くなる前に何かオープニング的になにか映像を流してもいいのではないのでしょうか。(普段の活動の様子など) 野外での映画上映とても気持ちよく、学生時代以来で観たローマの休日もすごく良かったです。ナイスなセレクトです。準備された皆様おつかれさまでした。(40代女性)

・It's good to be here. Nice view and cool winds. Perfect. Thanks. (20代男性)

・次回も楽しみにしています。(40代男性)

・学外の参加者の案内役を決めていたほうがよかったと思います。(50代男性)

・継続できるようにワンコインくらいで、どしどしやったら。(60代男性)

・新聞社?の人に座るところを指定された。スタッフがあらかじめ誘導すればよかった。(20代男性)

・時間を、7:30スタートであればよかったと思う。(50代男性)

・楽しかったです。(30代男性)

7. その他(ポスターと野外上映会の写真)



野外上映会&イルミネーション

Summer Night Theater

～夜空の下で映画を楽しみませんか?～

7/22 SUN
19:00 start

—上映作品—
アッサー・ロマン
ローマの休日
ROMA VACANZE

会場: 福井市中央公園 北側芝生広場

- ・入場無料・飲食自由
- ・もし可能であればレジャーシートをご持参ください。

※強風・雨天の場合はアッサー7階 Fスクエアで14時から行います。

お問い合わせ
福井大学国際地域学部支援室
TEL: 0776-27-9936
Email: s.gossien@ad.u-fukui.ac.jp
Twitter: @fukui_joikai

【主催】福井大学国際地域学部
【イルミネーション協力】福井大学工学部明石研究室

© 1953 Paramount Pictures Corporation. All Rights Reserved.

イルミネーションに彩られた今日だけの特別な映画館

Summer Night Theater

7/22(日) 開演 19:00

会場: 福井市中央公園北側芝生広場

【主催】福井大学国際地域学部 【イルミネーション協力】福井大学工学部明石研究室

—上映作品—
アッサー・ロマン
ローマの休日
ROMA VACANZE

入場無料・飲食自由
もし可能であればレジャーシートをご持参ください。

※強風・雨天の場合はアッサー7階 Fスクエアで14時から行います。

お問い合わせ
福井大学国際地域学部支援室
TEL: 0776-27-9936
Email: s.gossien@ad.u-fukui.ac.jp
Twitter: @fukui_joikai

© 1953 Paramount Pictures Corporation. All Rights Reserved.



課題探求プロジェクトⅡ（2年次後期：グローバルアプローチ）
課題探求プロジェクトⅢB（3年次後期：グローバルアプローチ）

平成30年度の取り組み

日本・ミャンマー合作映画『僕の帰る場所』の福井メトロ劇場における上映
を支援する学生主催イベントの開催

1. プロジェクトの概要

本年度後期は、グローバルアプローチの2年生を対象とする「課題探求プロジェクトⅡ」の一方のクラスと同3年生を対象とする「課題探求プロジェクトⅢB」の一方のクラスが合流し、福井市出身の映画プロデューサー、渡邊一孝氏が手がけた日本とミャンマーの合作映画『僕の帰る場所』の県内初上映（2019年2月9日～、於 福井メトロ劇場）に向けて、二つの取り組み（①映画に関する理解を深めるための取り組み、②映画の福井県内初上映を支援する取り組み）を行った。その成果発表の場となったのが、映画の公開日に先立つ2月3日（日）に、大学連携センター「Fスクエア」（アオッサ7階）において開催された学生主催イベント「ふくいシネマラボ」である。テーマは、「地方にとっての“小さい映画”と“小さい映画館”の在り方」。「小さい映画」（＝『僕の帰る場所』）に関する渡邊氏の講演と「小さい映画館」（＝福井メトロ劇場）に関する同劇場代表の根岸輝尚氏の講演、それに両氏と学生たちがパネリストを務めたトークセッションからイベントは構成され、マスメディア（新聞・テレビ）やポスター・チラシ、SNS等を通じた宣伝・広報活動の甲斐もあって、県内の映画関連諸団体の関係者など、映画に関して一家言をお持ちの方々に多数ご来場いただいた。

今回のイベントを通じて、映画作品の制作が商業ベースに左右されるあまり、その多様性が損なわれつつある現状、そして、商業施設と一体化して売れ筋の作品を上映するシネマ・コンプレックス（通称シネコン）に客を奪われ、ミニ・シアター系の映画館の経営が逼迫している現状に対する問題意識を、世代を超えて共有することができた（少なくともそのきっかけを作ることはできた）と言えるだろう。市場原理に基づくグローバル化の急激な進行に伴い、無分別な効率化・画一化が社会の隅々にまで浸透しつつある現在、文化の多様性が蔑ろにされる傾向が、特に地方都市においては著しい。それに歯止めをかけるためには、どうすればよいのか。映画と映画館の現状を通じてそうした問題と真摯に向き合った3時間でもあった。福井メトロ劇場よりお借りした、手描きのものを含む貴重な年代物の映画ポスターの数々が、硬派のテーマを扱ったイベントに華を添えてくれたことも付言しておきたい。

2. 授業の進行

10月	<p>※「課題探求プロジェクトⅢB」のクラスのみで実施</p> <p>(10日) クラス分け⇒オリエンテーション</p> <p>・日本とミャンマーの合作映画『僕の帰る場所』の福井県内初公開(2019年2月9日～、於 福井メトロ劇場)に向けて、次の二つの取り組みを本プロジェクトにおいて実施することを確認</p> <p>①映画に関する理解を深めるための取り組み</p> <p>②映画の福井県内初公開を支援する取り組み</p> <p>(24日) 受講生各自がミャンマーに関連するリサーチ結果を報告(ミャンマーに関する基礎知識を共有)</p>
11月	<p>※以降、「課題探求プロジェクトⅡ」のクラスとの合同クラスで実施</p> <p>(14日) 『僕の帰る場所』の学内試写会及び同作品の制作プロデューサー、渡邊一孝氏による講演会・意見交換会を開催</p> <p>(21日) 二部構成で実施：</p> <p>・本プロジェクトの取り組み①の一環として、本学部教員、月原敏博氏による講演会(題目；「ビルマ(ミャンマー)と「ビルマ的世界」、そのほか」)を開催</p> <p>・本プロジェクトの取り組み②に関連して、映画の宣伝・広報活動のさまざまな可能性を探るべく、受講生が3グループに分かれてグループ・ワークを実施</p>
12月	<p>(5日) 二部構成で実施：</p> <p>・前回に引き続き、本プロジェクトの取り組み②に関するグループ・ワークを実施</p> <p>・本プロジェクトの取り組み①の一環として、『僕の帰る場所』に影響を与えた可能性が考えられるスペイン映画『ミツバチのささやき』を鑑賞</p> <p>(19日) 『僕の帰る場所』の福井メトロ劇場における封切(2月9日)に先駆けて、同作品と同劇場をPRする学生主催イベントを2月3日に大学連携センターFスクエアにて実施することを決定</p>
1月	<p>(9日、23日、30日) 2月3日のイベントの内容(タイム・スケジュールとプログラム)及びそれに至る間の宣伝・広報の進め方について検討</p> <p>・ポスターの掲示、SNSや報道機関を通じた映画のPR活動を実施</p> <p>・宣伝・広報への協力を得るため、さらにはイベントで展示する映画ポスターを借り受けるため、学生代表者が福井メトロ劇場を訪問</p> <p>・有志学生による会場(Fスクエア)の下見</p>
2月	<p>(3日) 学生主催イベント(「ふくいシネマラボ」)を開催</p> <p>(6日) アンケート結果の分析及びプロジェクトの振り返り</p>

3. プロジェクトの核となる三つの取り組み

(1)『僕の帰る場所』の学内試写会及び渡邊一孝氏の講演会

渡邊氏のご厚意により、商業上映に先立って映画『僕の帰る場所』の学内試写会を開催することができた（日時：11月14日 13:00～14:50/場所：大2講義室（教育系1号館2階））。3年生には、10月の授業時に各自が調べてきたミャンマーに関する基礎知識を共有する機会があったが、2年生の大多数は、おそらくこれといった予備知識を持たずに作品に接することになったはずである。98分の映画を全編鑑賞した学生たちの感想には、以下のようなものがあった。

- 私が学内鑑賞会で『僕の帰る場所』を観た時、「子供たちにとってのアイデンティティとは一体何か？」ということについて考えさせられた。ミャンマーから日本に来た夫婦。父はミャンマーで工学の研究をしていたにもかかわらず、日本でアルバイトのような仕事を強いられていた。その上、居住証が認定されないという状況が続いた結果、父親を日本に残し、母親は子供を連れてミャンマーに帰国する決断を選んだ。しかし、ここで子供たちに問題が生じる。2人の子供たちは日本で長く生活しており、母語として使っている言語は日本語だ。母親は日本から故郷に戻ることによって精神的に安定した環境に戻ることができるが、子供にとっては慣れない場所に適応しなければならないというズレが生じている。ほとんど日本語しか喋ることのできないカン君はミャンマー人の両親に生まれながらも、自分は日本人としての意識が強いと感じていた。私は、映画内で二つの国の間で揺れ動くこの子供の感情の描き方が非常に印象的だと感じた。タイトルの「僕の帰る場所」は子供たちにとって一体何処なのかを、彼らが考え、葛藤している姿を社会的な視点だけではなく家族の一員としての姿として描いていたところに惹かれた。
- 映画を観たときは、日本に移民してきたミャンマー人家族が困難に立たされながら生活する姿をみて、正直なところ身近に同じような状況に置かれた家族はいないため実感はわかかなかった。しかし移民の手続きをする窓口にいた女性の冷たい対応や、違法に働いてしまっていた父親を取り押さえてきた警察の姿をみて、決死の思いで日本に来たであろう移民の気持ちに全く寄り添わないことはなんと残酷なのだろうと思った。家族が離ればなれになった後の主人公の男の子の複雑な気持ちも、ミャンマーでの新しい環境に慣れていく弟の姿と対比されていてとても印象に残っている。
- 私はもともと、移民についての映画などを進んで見ることはなく、この映画を見る前まで、重たい雰囲気映画だろうと思っていた。しかし、ただ重いだけではなく、今まで見てこなかった映画を見ることにより、現在日本でも問題になっている移民の問題について知ることができて知識になったと思う。第一印象としては、移民の

話というよりも、家族の絆の話であったという印象がある。空港で別れる時に泣いて別れるシーンや、ビデオ通話でコミュニケーションを図るシーンなどが、印象的だった。また、移民問題についてあまり知らなかったために、難しいシーンもあった。途中で入国審査官のようなところに呼ばれた理由がわからなかった覚えがある。すべてのシーンに対して説明をあまり入れることなく、映画を見た人が自分たちで考えられるようになっていくことが深いなと思った。

- 映画『僕の帰る場所』を観た第一印象としては、日本の移民者に対するサポートが足りていない厳しい現状に対する不満や、今まで育ってきた国と自分が持つ国籍の国との間で揺れる子供の思いを感じ、最後はミャンマーでの暮らしを受け入れた長男のカウン君に感動させられた。また、映像として色合いが少し暗めな印象を受けた。日本での暮らしは、ミャンマーでの暮らしと比べると利便性が高いイメージだが、そういった違いの中でもミャンマーにしかない良さがあると思う。だからと言って、ミャンマーで暮らすことを家族が決めたことはいいことであるという見解を伝える映画ではない。日本は難民の受け入れ体制を十分に整えていないということを改めてこの映画を見て気づかされた。
- 私がこの映画を見た第一印象は「新鮮」である。こう思った理由は、まず、私は映画をあまり見るタイプではなく、さらに『僕の帰る場所』のようなドキュメンタリー映画を見ることはまずないからである。しかし、実際に鑑賞してみるとすごく引き込まれて、映画一本を見るのがあっという間に感じた。登場人物の心理が繊細に描かれており、また、それと同時に日本における移民問題についてリアルに描かれていて、とても考えさせられる内容であった。
- この後期の課題探究プロジェクトに取り組むうえで、『僕の帰る場所』という映画を鑑賞できてよかったと思っている。その理由は、この映画を観ながら、登場人物の子供たちや厳しい状況に置かれる大人たちに感情移入し、感動できたからである。真剣このストーリーにのめりこみ、随所で「かわいそうだ」、「えらい子だ」、「どうしてそうなるのか」と考えながらみていたため、頭も心も動いた学内試写会であった。鑑賞後は、「私が気づけていないような思いや事情もたくさんあるのだろう」というむずがゆい感覚を味わった。[.....]「移民問題」や「外国人の住居問題」という場面設定があえて作品の中で伏せられている点はおもしろいと思った。私の第一印象のむずがゆい感覚というのはここからきていたのかもしれないが、この曖昧な情景によって、強い感動と集中力が掻き立てられたのではないかと、いま思う。
- まず、映画を見る前には、こういった映画を見た経験が少ないため、あまり興味は沸いてこなかった。しかし、見た後には「見て良かった」という気持ちになった。映画は非常に見やすく、移民やミャンマーについて事前情報が全くなくても理解できる。むしろ、まったく知識がないほうが、家族が置かれた理不尽な状況に共感したり、体制などについての問題意識も得られたりするのではないかと感じた。また、

3年生の間で共有するために、事前に調べていたミャンマーに関する知識や情報が映画を観賞するうえで役立った。

- 『僕の帰る場所』は日本に住むミャンマー人の家族の生活を描いた作品である。私は作品を初めて見たとき、とても身近な物語であると感じた。勿論私たちは日本国民であり、ケイン一家のような状況に置かれることはまずないだろう。しかし町を見渡してみると昨今はたくさんの外国人が生活している、東京などの大都市ならなおさらだろう。私はこの映画を見たとき、近所のコンビニで働いている外国人、道ですれ違った外国人の親子が今直面している問題かもしれない、また、外国人が経営する飲食店も増えてきているが、彼らが乗り越えた問題かもしれないと考えた。私はこの映画を、日本人が直面していないながらも身近な問題をテーマとした作品であると考えた。また、この作品は移民問題をベースとしながら様々なテーマを秘めていると思う。夫と役所や政府職員のやり取りから日本の移民に対する対応の現状を、兄・カウンのミャンマーでの生活と家出からは、アイデンティティの喪失と獲得の問題を、弟・テックんとミャンマーの親戚との交流からは異文化コミュニケーションの重要性を学ぶことができた。
- 初めて映画を見たときは複雑な気分だった。日本のずさんな外国人労働者への対応に腹が立った。映画を見た当時、ちょうど日本政府が、外国人労働者をあくまで技能実習生として受け入れようとして議論がなされている真っ只中だったために、余計に今後の日本で働こうと考えている外国人の事を思うと胸が痛んだ。個人的には、ミャンマーでの家出の後、学校に行くときに兄の顔になっていたカウン君の顔が印象的だった。

映画の試写会に引き続いて、渡邊氏の講演会が実施されたが、それが単なる一方通行型の講演に終わることなく、学生や教員との意見交換が活発になされたのは、ファシリテーターの役割をも務めてくださった同氏の手腕に拠るところが大きい。講演会に関して、学生からは以下のような感想が寄せられている。

- プロデューサーの渡邊さんは福井出身の方だが、この映画を作るにあたって別にミャンマーにゆかりがあったわけではないと聞いてとても驚いた。演じていた母親と子供は本当の移民の家族であり演技に関してはまったくの素人であったという話にもとても驚いた。問題をひとつ取り上げてそれをただ説明するのではなく、映画で視覚と聴覚を通して直接心に訴えるためには相当な量の調査と情報収集が必要であったことがすぐに分かった。映画を観た後に、意見交換をする時間があつたが、印象に残ったシーンなどは人それぞれで、主人公の男の子だったり、まわりで支え合っていた人たちの姿であったり、移民と反対の立場にいる日本人だったり、観た人が問題だと思うことは映画の中の様々なシーンに散りばめられていると思った。

学内試写会を通して、ミャンマーの移民問題をひとつ取り上げるにしても、移民をせざるを得なくなるミャンマーの経済状況や、日本の移民への対応策、日本での移民家族の生活、そうした家族の子供の学習環境など、改善すべき点は多方面に広がることが分かった。

- プロデューサーの渡邊さんの講演を聞いて、まずこの映画の役者が俳優ではなく実際のミャンマー人の親子であるということに驚いた。実際の親子による映画を作ること家族の温かさやリアルな人間味のある話をこの映画を観た人に伝えられるのではないかと感じた。渡邊さんは映画を観た後のワークショップとして、印象に残っているシーンを聞く形をとっておられた。ただ感想を聞くのではなく、映像として心に残っていることをそれぞれが話すことにより、聞いているほかの人も、「こういう映像あったな」とか、「私はあのシーンに対して違うようにとらえたな」といったように、頭にそのシーンを思い浮かべながら映画について語れるスタイルが良かったと感じた。
- 試写会の後は、プロデューサーの渡邊さんによるワークショップが行われた。自分が印象に残っている場面をいくつか思い出して書き、共有するというものであった。私は、カウン君がお母さんに薬（ガチャガチャのカプセル？）を作ってあげる場面や、カウン君が、父と母が口論しているとなりの部屋で勉強している場面や、空港でお父さんと子供が抱き合う場面などを書いた。私が心を動かされたのは、家族の絆が感じられたり、子供の複雑な気持ちに共感できたりする場面だった。また、他の学生や先生の意見を聞くと、自分とは全然違う場面を挙げたりしていて、人によって感じ方が違うのも面白いと思った。
- 渡邊さんの講演・授業では意見や感想の交換をしたが、各々考えていることが大きく違った。その人のバックグラウンドや価値観などが印象に残った場面（一番初めに思い浮かぶ場面）に反映されており、それらが十人十色であると実感できた。前期の課題探究プロジェクトでは国の壁を越えた文化の「多様性」をテーマにし、国際フェスティバルの活動に取り組んだが、今回は映画鑑賞と意見の共有という活動を通して価値観の「多様性」を直に感じる事ができた。
- プロデューサーの講演を通じて、この映画の特徴を知ることができた。1つはバックグラウンドがほとんど明かされないという点である。この映画の中で、ケイン一家がなぜ故郷を離れ日本にやってきたのかは明らかにされていない。また、夫だけが日本に残る理由も明確ではない。そうすることで観客は映画を見たあとでバックグラウンドについて調べることができ、それにより作品についてより深く知ることができ、知識も深められる。2つ目は二人の少年の存在である。カウンが日本に帰ろうとミャンマー市街地に飛び出し、迷子になっていたところを二人の少年に助けられる。二人は日本語を話し、カウンの友達となる。彼らはスタッフの間では「キジムナー」と呼ばれており、彼らについても情報は何もなく、さらには実在するの

かさえ曖昧である。現実の世界の出来事であるこの作品にカウンの家出と「キジムナー」との出会いによっておとぎ話のような少年の冒険物語の側面が付け加えられている。日本とミャンマーの狭間で自分を見失ったカウンは家を飛び出し、不思議な少年と出会い、自分を再確認するのである。

- ▶ プロデューサーはたびたびワンカットワンカットに込める熱い想いを口にしていった。また、学生から印象に残った描写などを聞き出していた。映画の中におけるコマ数秒の描写によって我々視聴者は登場人物の感情の機微などを読み取れるのだなと知った。映画の途中、少年がミャンマーでひとり旅をするシーンでは、日本語しか話すことのできない少年がまわりの大人達にひやかせるような場面があった。現代でも、よく「日本語を話せる人は日本人である」とか「生まれた場所、育った場所が日本であれば日本人である」といった日本人の定義がなされることがある。自分はこの映画の少年のような日本とミャンマーの板挟みになった人生を送っていないからこそ、真剣に考えるべき問題であるように思った。また、同じく少年が旅をするシーンで日本人らしき少年二人が彼に声をかける、という場面をプロデューサーはどうしても入れたかったとおっしゃった。フィクション的作品の中でこうしたスピリチュアル的要素を取り込むことで少年の中の変化を描写していた。

(2) 学生主催イベント(2月9日開催)に向けた宣伝・広報活動

『僕の帰る場所』の福井県内初公開を支援する取り組みとして、2月9日の封切に先がけて、この映画に関連するイベントを開催することが正式に決まったのは、12月19日のことであった。その際に、このイベントを、同作のような商業ベースに乗らない映画作品(学生たちの言う「小さい映画」)のみならず、それにもかかわらず、こうした作品の存在意義を認めて上映する地域密着型の映画館(学生たちの言う「小さい映画館」)である福井メトロ劇場をも、地域の人々に幅広くPRする機会にすることで合意した。イベント開催までの期間が6週間(年末年始を挟むため、正味ひと月)ほどしかなかったが、この間に学生たちは三つの班に分かれて、多角的な宣伝・広報活動を行った。

- ① ポスター・チラシ班：横森まどか、宇野晴佳、杉山葉里、田中榛名、坪川穂香
- ② 展示ポスター班：米原杏奈、後藤健也、廣瀬まい
- ③ 広報班：久末麻梨乃、広瀬汐理、長田優輝、半田七彩、福井理文

* ポスター・チラシ班は、掲示用・配布用のポスター・チラシのデザインづくり、展示ポスター班は当日会場で展示するポスターの作成、広報班はテレビ・新聞やSNSによる宣伝活動が主な仕事内容である。

学生たちがイベント本番に向けて行ったさまざまな情報発信の取り組みについて、彼

らの最終レポート（実施報告書）から言葉を拾う形で、その詳細を振り返ってみたい。

①ポスター・チラシ班

- チラシを制作する上においてまず決めなければいけないことは、「イベントのタイトル」「講演で渡邊さんと根岸さんに何について話してもらうか」「講演の他に学生企画として何を行うか」「何を展示するか」「タイムスケジュールをどう設定するか」だ。学生間だけではなく、講演者のお二人と連絡を取りながらそれらを決定していく必要があった。
- チラシのレイアウトでは、イラストや文字をどのように配置すれば注目を集められるか考えながら作成した。今回は白黒ではなくカラープリントだったため、目立つような配色のオレンジのチラシが作成できた。チラシを作成するという経験は中々他の授業で得られるものではないため、非常に意義のあるものとなった。
- チラシを作るにあたって 2 週間弱の短い期間で渡邊さんと根岸さんの講演の内容、トークセッションのテーマ、イベント全体で深めるべきテーマやイベント自体の興味を引く名称など、決めなければいけないことが多数あり大変だった。チラシのデザインの締め切りの 2 日前くらいにようやくイベント内容がある程度確定し、急いでチラシを作った。チラシを作ること自体初めてだったので、いろいろなイベントチラシを参考にした。結局私のデザインはボツ案になってしまったが、ひとつのイベントチラシを作ったことは良い経験になったと思っている。
- チラシやポスターのデザインは、担当の人が大体デザインを決めてくれたのをみんなで最終的に検討した。軸となる「ふくいシネマラボ」「福井の未来を話しねま！」というイベント名は、みんなで考えて決めた。これは、よりたくさんの人を引き付けるためのキャッチフレーズとして十分な役割を果たしたと考えられる。なぜなら、イベント当日は映画好きの方が多く来てくださったからだ。「ふくいシネマラボ」という言葉を大きく掲げることにより、映画に関するイベントであると印象付けられるチラシになったのではないかと考える。
- ポスターの掲示場所は、大学では学科ごとの掲示板くらいであった。大学外でもあまり多くの人の目につく場所に貼れなかった印象がある。サークルの宣伝ポスターは、一人 3 店舗ポスターを依頼してくるのをノルマにしていたので、そういうやり方を取り入れてもよかったのではないかと考える。
- アオッサ 1 階の展示スペースを予約し、そこにポスターを置くことができれば、ポスターを見て来場してくれる人が増えたのではないかと思う。
- ポスター・チラシ班は、何よりもまずそのデザインを考えなければならなかった。しかし、イベント自体の名称や、渡邊さんと根岸さんをお願いする講演の内容・見出し、学生主催のトークイベントの内容などが決まらないとチラシを作れないので、まずはそれらについて考えた。全員が集まって話し合うことは難しいので、

意見交換はほとんど LINE 上で行われた。全体のグループ LINE と、班ごとのグループ LINE を作り、そこで意見交換をした。班ごとに話し合って意見をまとめ、全体 LINE で報告するという形で進められた。まず、ポスター・チラシ班の LINE では、イベントの趣旨、お二方の講演内容、学生によるディスカッションの内容について、一人一人意見を出し合った。この時点では、ディスカッションの内容は、一般の人でも気軽に参加できるような、「好きな映画」や「おすすめの映画」に関するものが良いという意見でまとまっていた。お二方の講演内容については、一般の人にも興味を持ってもらいやすく、かつ映画の PR やメトロ劇場の宣伝なども兼ねたものにする必要があり、話し合いはとても難航した。先生や渡邊さんの助言により、なんとか意見がまとまり、学生によるトークセッションのテーマも「地方にとっての“小さい映画”と“小さい映画館”の在り方」に決定した。次に、イベント自体のタイトルを決めなければならなかったが、これも考えるのがとても難しかった。イベントの内容をふまえ、シンプルかつキャッチーな名前を考えなければならなかった。結局、「福井の未来を話しねま！福井シネマラボ」に決定した。これらが決まってから、ようやくチラシづくりを始めることができた。本格的に作り始めたのは、1月21日からだった。ポスター・チラシ班4人で、一人一つのデザインを考えた。私は、最終的に選ばれた二案のうちグリーンベースのものを作成した。パソコンでこのようなチラシを作るのは初めてだったので、かなり苦戦したが、結果的に良いものができたので満足している。また、チラシが決定した後は、学内や、国際交流会館、メトロ劇場など学外にチラシを貼らせていただいた。もう少し早く、イベントの内容について話し合って決めることができれば、もっと早くチラシを完成させることができ、学内外でのチラシ掲示期間が長くなり宣伝効果も期待できたと思う。

- ポスター・チラシ班には4人のメンバーがおり、各自でポスター案を作成して持ち寄った。タイトル、日時、イベントの内容、講演やトークセッションのテーマなどがわかるものを作る必要があった。私は、ターゲットを映画好きの方々を中心に考えていたため、映画についてのイベントであることを重視し、映画のフィルムなどを用いたデザインにした。最終的にデザインは授業の際、全員の多数決で決められ、黄色や緑など、目を引きやすいデザインの物になった。

②展示ポスター班

- 展示ポスター班の仕事に関しては当初、3年生の米原さんを中心にミャンマーの基礎知識を来場者に教える形式のポスターをつくる計画が進んでいたが、結局、案のままで終わってしまった。最終的に展示ポスター班は、イベントにて、来場者が懐かしいと感じるようなメトロ劇場の過去上映作品のポスター展示を行うことになった。ここでは2年生の後藤君を中心に、お借りできるポスターをめぐ

ってメトロ劇場と連絡をとりながら、『羅生門』、『ローマの休日』など、ポスター写真を見ながら展示に用いるものを選考した。

- 主な作業内容は『僕の帰る場所』の場面スチール写真とメトロ劇場に保存されている上映当時の映画のポスターの展示である。メトロ劇場の根岸さんに連絡したところ、同劇場には数千枚のポスターが保管されていることがわかり、その中から15枚を選ぶこととなった。展示ポスター班の中で検討した結果、『七人の侍』、『羅生門』、『東海道四谷怪談』、『ロッキー』、『メリーポピンズ』、『燃えよドラゴン』、『13日の金曜日』、『The Beatlesのヤアヤアヤア』、『小さな恋のメロディ』、『カサブランカ』、『ローマの休日』、『鉄腕アトム』、『ゴジラ 1983』、『ピーターパン』、『白雪姫』のポスターが選出された。班員で話し合い、邦画、洋画、アニメ、特撮、ホラー、ラブロマンス、アクションとできる限り沢山のジャンルの映画ポスターを展示できるように配慮した。また、私はメトロ劇場のような映画館の強みは古い名作映画を上映できることだと考えていたので、『ロッキー』、『メリーポピンズ』、『ゴジラ』はそれぞれリメイクやスピンオフ作品が今年上映されることに注目し、それらの作品の起源を教えてくれるポスターを展示しようと考えた。反省点としては、『僕の帰る場所』に関する展示とメトロ劇場からお借りしたポスターの展示との情報量に差ができてしまったことである。当初は、『僕の帰る場所』のあらすじやミャンマーの基礎情報を展示物に掲載する予定だったが時間が足りず、いくつかの場面のスチール写真を掲載するだけになってしまった。また、映画のポスターに関しても、映画に関する情報や見どころを吹き出し形式で表示する考えもあったが、同じく時間が足りず、結果として『僕の帰る場所』についても、メトロ劇場についても、共にただ写真とポスターを展示するだけになってしまった。

③広報班

- 広報班の中では、まずどういった媒体で広告していくのかということ話し合い、テレビ、新聞、チラシ・ポスター、SNSといった媒体で宣伝していこうという方向性が決まった。チラシやポスターの作成はポスター・チラシ班が担当するため、我々広報班はSNSによる宣伝に加えて、「おじゃまっテレ」班、「おかえりなさい」班、新聞班に分かれてマスメディアを利用した宣伝活動をした。
- 私たちが担当した仕事は主にTwitterを通して映画やイベントの宣伝をすること、福井新聞の取材を受けること、福井放送の夕方の情報番組「おじゃまっテレ」に出演して映画とイベントの宣伝をすることであった。

◎新聞／テレビ担当

- まず、私は『僕の帰る場所』に関連するイベントの宣伝として、福井新聞の取材

を受けた。新聞記者の方には先生にアポイントメントをとってもらい、福井大学にお越しいただいて取材を受けた。取材の内容は、イベントの趣旨や内容、そして、私たち学生自身の映画事情についてであった。取材の後、メトロ劇場に行き、新聞の写真を撮っていただいた。また広報活動として、テレビ出演も検討した。

「おじゃまっテレ」(FBC)の「みんなの伝言板」の担当の方に連絡し、イベント開催の週の金曜日に出演することが決まった。テレビ出演当日にはテレビイベント用に印刷した大きいサイズのポスターを使って、数十秒間の宣伝を行った。

- 私にとって、新聞取材やテレビ出演は経験がなかったので、学生だけで取材を受けたりテレビ出演の準備をしたりすることは、とても良い経験になったのではないかと思う。
- 新聞やテレビでの宣伝は、イベント直前にアポイントメントを入れことになったので取り上げてもらえるかどうか不安だったが、テレビ局1社の番組に出演し、新聞社2社に記事を書いてもらうことができた。アンケートによると、新聞を見て来てくださった方が4名、テレビが1名おられて、この人数は一見少ないように思えるが、その何倍・何十倍の方が新聞・テレビを通じてイベントの開催を知ったはずであり、やはり新聞とテレビを通じた宣伝・広報が果たす役割は大きいと感じた。
- テレビ局へ連絡をとるのが遅すぎたと思う。少なくともイベントの3、4日前なら確実にチラシも内容も決まっていると思うので、テレビでも宣伝すると決まった時点で連絡を取るべきだったと思う。
- 福井放送の夕方のワイドニュース番組への出演の予約をした。また、出演の際に必要な大判のポスターの準備や当日読み上げる原稿の準備をした。特に難しいと感じたのは伝えたいことを15秒に納めなくてはならないことである。今回伝えなかった内容はイベント名や主催者、日時や場所などの基本情報、トークセッションと講演会というイベントの内容、さらに映画の宣伝と、どれも重要で多くの人に知ってもらいたい内容だったので、情報の取捨選択が非常に難しかった。事前に考えておいた原稿は放送前に番組のプロデューサーの方に添削をしてもらったり、アナウンサーの方に補足を入れてもらったりすることで何とか伝えたいことをすべて言えるようにしてもらえた。しかし、実際には映画が受賞した賞の話や映画の内容、また講演の内容やトークセッションの内容は伝えることができなかった。視聴者の方には必要最低限の情報しか伝わらず興味を持ってもらうのが難しかったのではないかと感じた。準備作業についての反省点としては、なるべく早くアポイントを取らなくてはいけなかったという点である。今回はイベント自体の内容が確定したのが遅かったこともあり、もう一つの民放である福井テレビには出演することができなかった。そのため、次回はイベントをすることが確定した時点でなるべく早くアポイントメントを取るべきだと思った。

- 私は福井新聞の取材を受けた。新聞のアポイントメントは先生がとってくれたため、私としては取材を受け、写真撮影に臨むぐらいであったため特に大きく得られた知識や経験はない。ただ新聞の取材を受けること自体は初めてであったため貴重な経験であったと考える。ここでの反省点としては、新聞の取材を受けているときにまだ肝心の企画が細部まで決まっていなかったことが挙げられる。特にトークセッションの部分などぎりぎりまで構成を考えていたため取材にうまく答えづらいところがあった。イベント全体の構成が決まっていない段階での広報にはどうしても行き詰まる部分があると感じた。
- 今回の広報活動についてはターゲットが絞りこめていなかったように感じ、そこが反省点だと感じた。ターゲット設定が明確でなく、とりあえず多くの人に見てもらおうという漠然とした目的の上で宣伝してしまうと、次のプロジェクトのための反省となるデータや、似たようなプロジェクトを行うときのための再現性のあるデータが取れないと思う。広報活動や宣伝活動は、まずターゲットを決め、その人たちが実際に「鑑賞しに来る」、「参加する」という具体的なアクションに繋がるためにどのような売り文句が必要か。また、それをどの媒体で発信すればターゲットにしっかり届くのかということをもっとしっかり吟味して、行うべきであったと思う。

◎SNS 担当

- ポスター・チラシ班が作成した 2 種類のポスターと、2 種類のチラシ 15 枚ずつ (30 枚) をメトロ劇場へ持参した。またそのときにメトロ劇場のホームページでも宣伝していただけるようお願いした。1 月 26 日に伺ったのだが、受付に居た二人の方が対応してくださり、ポスターとチラシは直ちに設置していただき、その日のうちにメトロ劇場のホームページにもイベントの情報を掲載していただいた。準備、宣伝期間が短い中で素早く協力してくれたお二人には非常に感謝している。
- 今回はメトロ劇場の方がホームページや Twitter でも宣伝してくれたため、映画に興味のある人たちに対して短期間で情報発信が出来た。
- イベント前の SNS による宣伝では、ツイッターを使って発信していたが、メトロ劇場や渡邊さんによるシェアのおかげもあって、一般の映画好きの方々が多く反応してくださっていたので、その効果も大きかったと思う。
- 今回実施したアンケートからは、メトロ劇場のホームページやツイッター、チラシなど、同劇場による宣伝をきっかけに来てくださった方が多い印象を受けた。
- イベントの詳細が決まってから、1 週間程度で、0 に近かったフォロワーを 120 人くらいにまでに伸ばし、友達の友達や、メトロ劇場などのファンをフォローし、できるだけ毎日ツイートするようにした。今回はメトロ劇場のファンをフォロー

することで、イベントへの参加者が増えたと思う。

- イベントを開催する際には、協力してくれる方達をフォローしたり、サポートしたり、その分野に興味がある人に、情報が届くように、ホームページに乗せてもらったりすることが大切であると感じた。SNS でも、今回であれば、メトロ劇場にリツイートしてもらえたため、集客効果が上がったのではないかと思う。
- Twitter では、ツイートが 140 字までしか使えず、また文字を強調することが難しかったため、イベントの内容を詳しく、なおかつ目立つようにするために絵文字を使ってみた。(https://twitter.com/fukui_cinematlab) 最初に『』などを使って強調させることもできたが、多くのツイートの中で目立つようにするためには、絵文字が効果的だったのではないかと思う。
- Twitter は基本的には 3 年生が動かしてくれていたが、フォローをしてもあまりフォローが返ってこなかったのも、実際には 100 人程度にしか SNS を通じて広められていなかったのではないかと感じた。もっとフォロワーが多い、今回ならメトロ劇場や福井大学のアカウントに拡散の協力をお願いするべきだったと感じた。さらに、SNS をあまり見ないような世代にも拡散できるように、ラジオ出演や新聞の折り込みチラシを使うことも検討すればよかったのではないかと思った。

(3) 学生主催イベントの開催

「ふくいシネマラボ」と題されたイベントは、映画『僕の帰る場所』の福井メトロ劇場における上映（2月9日（土）～2月22日（金））に先駆けて、以下のとおり開催された。

- 日時:平成 31 年 2 月 3 日(日) 12:00～17:00
- 場所:大学連携センターF スクエア(アオッサ 7 階)
- プログラム:
 - (1)基調講演(14:00～15:30) 【司会:半田七彩】
 - ①講師:根岸輝尚氏
題目:地域の中でメトロ劇場が果たす役割
 - ②講師:渡邊一孝氏
題目:『僕の帰る場所』をメトロ劇場で公開する意義
 - (2)トークセッション(16:00～17:00) 【司会:坪川穂香】
【学生パネリスト:広瀬汐理、米原杏奈、宇野晴佳、廣瀬まい】
- 常設展示(12:00～17:00))
 - (1)『僕の帰る場所』のスチール写真の展示
 - (2)メトロ劇場所有の映画ポスターの展示

上記（２）で見た宣伝・広報活動においては、３年生が中心的な役割を果たしたが、イベント当日は、講演会の司会、それにトークセッションの司会や根岸氏、渡邊氏とともに登壇するパネリストの重責を２年生が積極的に担ってくれた。学生たちの最終レポート（実施報告書）から抜粋した彼らの証言を通じて、イベント当日の取り組みを振り返ってみたい。

◎会場設営

- イベント当日は、１１時にＦスクエアに集合した。私は、７人くらいでパネルを運ぶのを手伝った。
- 会場は、福井駅前のアオッサの７階のＦスクエアで開催した。講演会では、Ｆスクエアにあった机をすべて控室に移し、お客さんがたくさん入れるような配置にした。後半のトークセッションは、パネリスト用の机といすを前に用意し、お客さんは講演会同様の椅子の配置で実施した。
- 当日の１１時前に会場に到着し、まずは会場の設営を手伝った。私自身は都合が合わず下見には行けなかったため、想像よりも会場が狭く驚いた。下見に行った人たちもホール全体を使えるものだと思っていたらしく、同じく驚いていた。
- 予想以上に来客数が多かったので、講演中席を増やさなければならず、パネルを移動しなければならなかったことが反省点だった。どれだけ参加するかは未知数だったためにこのような事態になってしまったのは致し方ないが、狭いスペースで講演と展示を行うのは難しかった。しかし、講演と展示を同時並行で行うことにもメリットはあった。映画好きが多く集まった参加者は、興味深そうにメトロ劇場に以前貼り出されていたポスターや『僕の帰る場所』の画像を眺めていた。Ｆスクエアは入り口すぐの空間を２つに分けた片方しか借りられなかったためこうなることは避けられなかったが、もっとスペースを有効活用した展示方法があったのではないかと考える。また、タイムスケジュールを参加者用に簡単に記載した紙を用意したが、３０人来客想定で刷ったために途中で無くなってしまい最後の方に来た参加者に配れなかったのが反省点だと思った。
- 当日使えるスペースが想像の半分だったことが一番のハプニングだった。パネルの配置などに戸惑いつつも、どのように展示するかが固まった後ではほかのメンバーの動きもとても素早くて連携もうまくとることができたように思った。ただ、当日にお借りできるスペースなどは事前に確認をとれたと思うし、そうであれば当日にレイアウトを考え直す必要もなかったのもっと密に会場側との確認を行うべきであったと感じた。また、予想以上の来客があったために、椅子やスペースを増やす必要があり、講演中に物音を立てる原因になってしまった。前期に行ったイベントでも客足が全く読めなかったが、こういった単発のイベントをする際の来場者数・参加者数の予想があまりにも難しいことを痛感させられた。

- イベントには予測をはるかに超える人数の来場者があった。サクラとして座っている予定だった私たちは、パネルを動かしたり、いすを追加したり、バタバタと動いていた。音を立てないよう、細心の注意は払っていたつもりだが、なかなかうまくいかず、参加者の集中を乱してしまったことは、イベントのアンケートにも書かれていた通りであり、反省点のひとつだ。

◎ビラ配り

- 当日はイベント開始 30 分前くらい（11 時 30 分）からアオッサ内でビラを配って宣伝を行った。正直に言ってビラ配りの宣伝効果は 0 に等しかったのではないかと思う。14 時からの講演直前にも声かけなどするべきだったかと思ったが、それも効果はあまりなかつたろうと思う。
- 11 時半ごろにチラシ班 4 人で分かれてチラシ配りをした。アオッサの内外にいる人に声をかけながら 15 枚程度くばった。しかし、受け取ってもらえなかったり、そもそも人が少なかったのも、あまり意味がなかったのではないかと思う。11 時半ごろから 12 時ごろまでチラシ配りをしたが、12 時から講演が始まる 14 時までの間に配ったほうが、効果があつたのではないかと思った。
- ポスターを A4 サイズで印刷したビラをアオッサの入り口や 1 階を中心に配布し、呼びかけを行った。イベント告知のポスターやビラの枚数は、展示する場所やイベントの規模を視野に入れる必要があり、決めるのが少し難しかった。

◎受付（アンケート担当）

- 受付担当の二人は来場者数を記録しながら、映画のチラシとアンケート用紙を渡していた。
- イベント中の私の与えられた役割は受付であった。そのためイベントにはほとんど関わっていない。開場は 12 時であったにもかかわらず講演の 30 分前の 13 時 30 分まで誰一人として客は来なかった。しかし 13 時 30 分からは予想を上回る人数が来たため用意していたプログラムの資料が不足するという事態に陥ってしまった。アンケートと映画の資料は足りたため特に問題はなかったが、今回のようなケースも予想して余分に印刷をしておくべきであったと感じた。来られた客層は、やはりメトロ関連の人もしくは国際地域学部に関係した人が多いように感じた。反省点について受付という立場から考えると、もっと来場者に声をかけるべきであったと感じた。アンケートの回収の際は声をかけたもののアンケートを渡す際にはほとんど声をかけていなかった。また座席にはテーブルが用意されていなかったためにアンケートが書きづらい、という問題や、講演だけで帰る方なのか休憩で外に出るだけの方なのかの区別がつかず、アンケートを出さずに帰ってしまう方や、アンケート用紙をメモ用紙として使ってしまい提出できない方がいた、という問題も発生した。

また受付から見て気づいたイベント主催者側の反省点としては、空調の問題が挙げられる。客のみでなくスタッフも薄着になり、さらに手や紙で扇いでいる姿が目についた。他のスペースとも共有になっていたため調整できなかったのかもしれないが、来ていただいた人にしっかりと聞きやすい環境を作るのも我々の仕事ではないかと感じた。また静寂な環境作りという点では、スタッフ同士の私語や、頻繁に起きる自動ドアの開閉が気になった。アンケートでも指摘があったように、周りでちょろちょろ動き回りこそこそしゃべられたら聴衆の集中力は乱れてしまう。イベントを開催したスタッフとして、そういった細かいところにも気を配ればよかったと感じた。

- 当日の作業ではないが、アンケート結果の分析は中々難しさもあり楽しかった。アンケートの最初に尋ねた顧客属性の部分と、下の部分の質問をどのように組み合わせると、意味のある、もしくは関連性がありそうなデータが出てくるかを考えるのは大変だったが、年齢別と知ったきっかけを組み合わせるのは良かったのではないと思う。最初の顧客属性の部分に、メトロ劇場に普段から通っている、もしくは馴染みがあるのかを質問に入れておけば、メトロに馴染みがある人とそれ以外を分けて分析できたので、必要だったかと反省した。

◎ポスター展示

- 『僕の帰る場所』のポスターや映画のワンシーンの写真、事前に福井メトロ劇場から借りていた昔の映画のポスターなどを、Fスクエアで借りた白パネルに展示した。
- 映画のポスター展示が会場の仕切りに使われている印象があまりにも強すぎたので、パネルを斜めに移動させると、開放的な印象になった。当日の様子をみて適宜改善に努めるほうがよりよいものになると、前期の「課題探求プロジェクト」の授業でも思ったことだったので、小さいことだが実践できてよかったと思っている。
- 当日は、メトロ劇場からお借りした『羅生門』や『白雪姫』などのポスターを掲示し、渡邊さんから頂いた映画のスチール写真を展示した。Fスクエアからお借りしたパネルは、想定していたより少なくても事足りた。無駄に借りてしまったことは反省点である。また、渡邊さんと根岸さんの基調講演に来てくださった方が想定よりも多く、座席を設ける関係でパネルが邪魔になり、途中で会場の外に移動させた。パネルの配置についてはもっと慎重に考えるべきであったと感じた。パネルの見せ方はもっと工夫できたと考えられる。また、メトロ劇場からお借りしたポスターは、ただそれを展示するだけとなってしまったが、少し手間をかけて一つずつコメントや紹介文などをつけられたらもっと興味を持ってもらえたのではないかと感じた。展示するポスターも、担当学生の独断と偏見で選んだものだったが、今回の来場者の中にはメトロ劇場によく行く方が多かったことから、メトロ劇場で人気のある映画をリサーチしてそのポスターを展示したらもっとお客さんに楽しんでもらった

のではないかと考えられる。

- 当日は主に映画ポスターの展示に関わった。当初は 15 作品を予定していたが、『ゴジラ』が見つからず 14 作品となった。また、予想に反して、イベントのスペースが小さかったため、途中からポスターを会場の外に出さなければならなくなってしまった。また、『僕の帰る場所』の場面スチール写真の展示スペースが演壇の近くになってしまい、見づらく感じた方もいらっしやっただと思うので、レイアウトをもう少し工夫し、どちらの展示もよく見える位置に展示すべきだったと思う。また、展示されている作品についての情報を提供する予定だったが、その機会を設けることができなかった。しかし、その準備段階で、様々な映画についての知識やエピソードを知ることができた。例えば、モノクロ映画である『羅生門』、『七人の侍』は雨のシーンの撮影の際、雨粒を強調させるために雨に墨汁を混ぜて撮影していたという。『燃えよドラゴン』において主人公と不良たちとの戦闘シーンがあるが、不良役には実際に撮影現場付近にいた不良が起用されたらしい。『カサブランカ』は第二次世界大戦中のアメリカ映画なので敵国であったドイツ人が全体的に悪者として描かれている、といった様々な発見があった。

◎司会（講演会）

- 司会者 2 名は講演会の進行とトークセッションの進行をそれぞれ担当した。講演会の司会者の半田さんは、プロデューサーの渡邊さんやメトロ劇場の支配人である根岸さんについて事前に調べ、そのプロフィールの紹介から質疑応答まで、スムーズに進行してくれた。
- 私が当日担当したのは講演会の司会進行である。前からお客さんの顔や反応を見ながら司会進行をすることができたので、反応が直に伝わってきたのが良かった。私が司会進行中に気を付けたことは時間の配分である。想像していたよりも講演会後の質疑応答でお客さんからの質問が多く、またそれに渡邊さんや根岸さんが答えることで答弁が白熱する場面が何度も見られた。しかし、すべての質問に答えていたら時間は無くなってしまいが、質問を無視してしまうのはよくないので、その兼ね合いが難しかった。多少の進行上の遅れはあったが、タイムスケジュールを余裕をもって組んでもらっていたおかげでプログラム全体としての遅れはなかった。

○講演会の印象について

- 講演会の間はサクラとして観客席にいたが、想定していたよりかなり多い数の参加者があり、とても驚いたのを覚えている。正直に言って学生と渡邊さん、根岸さんだけのごく内輪のイベントになると思っていたので、これはイベントをやったよかったですと思える点のひとつである。なにより映画の知識が豊富な方々が来てくれて、映画の知識が一般よりも乏しい私は発言する機会が全くなかったが、新鮮な情報や

経験が多く聞けて、参加者のひとりとして言うと、かなり興味深いイベントだったと思う。

○メトロ劇場について

- メトロ劇場はなんとなく入りにくい印象だったのだが、根岸さんが敷居の高くない映画館だとおっしゃっていたので、一度行ってみようと思った。ちょうどメトロ劇場の Twitter で面白そうな映画を宣伝されていたのでかなり気になっている。上映する映画は来てくれる人の意見がほぼ 100%反映されているといったことも初めて知ったので、それをもっと若い年代の層に発信していけば若者客の獲得に繋がるのだろうと思った。
- 根岸さんの講演において、メトロ劇場で上映する作品の系統をニーズや時代の流れに合わせて変えていったという話は興味深く、講演後にいただいたポスターのリストを見ると、上映作品のバラエティの豊かさに合点がいった。アニメや特撮、アクションの中にポルノ映画のポスターが多々あったので不思議に思っていたが、その理由も知ることができた。ジャンル、政策時期を問わず利用者のニーズに合った作品を上映できるのはメトロ劇場の強みだと考える。

◎司会（トークセッション）

- トークセッションの司会を担当した。トークセッションのテーマが少し難しかったことや渡邊さんや根岸さんと十分な打ち合わせができていなかったため、時間配分には苦労した一方で、余分な打ち合わせがなかった分、渡邊さんや根岸さんの自然体の話が聞けたのではないかと思う。なるべく和やかな話しやすい雰囲気づくりを心掛けたが、多少言葉選びがおかしかったり、司会者の余分な動きが多くなってしまい、自分の未熟さを痛感した。前半はなかなかトークが盛り上がりず、司会者の私がたくさん話してしまったが、後半は来場者の方々やトークセッションに参加した大学生からも意見が出て、何とかまとまりをつけることができた。

◎パネリスト

- 当日、私はパネリストの役割も務めた。映画館に行かない学生としての立場で渡邊さんや根岸さん、他の学生とトークセッションをさせていただく場を設けてもらった。しかし、私は最初の自己紹介の時しか発言できなかった。これは最大の反省点である。しかし、それは、見方を変えると、渡邊さんや根岸さん、そして私たち学生だけでなく、来場者の方々も積極的に発言して下さった証であるとも言える。実際、映画にとっても熱い思いを抱く方々が来てくださっていたことはとても印象に残っている。トークセッションとして、もっと構成を練っていたらテーマをより深く掘り下げることができたのではないかと感じた。全体的に少し話がぶれていたよ

うな印象がある。

- 当日のイベントでは、パネリストという貴重な体験をさせていただいた。おそらく、私はこの担当を与えられていなかったら、トークセッションの場で自発的に自分の意見を言うことはなかっただろう。熱い討論のなかに参加させていただいて非常に感謝している。
- トークセッションでは、司会担当と協力して映画についていろいろな発言ができたと思う。また、客席からも期待以上に多くの意見が得られて良い議論ができたと感じる。会場設営やイベントの準備や進行の時間配分、プロジェクターや机などの配置を考えるなど、いろいろな経験ができた。また、パネリストとして議論の中心に身を置くことで、積極的に意見を出したり、聴衆の反応を見たりすることができた。

○トークセッションの印象について

- イベント自体は準備期間も学生同士の情報共有も不十分だったので、完成度はかなり低かったのではないかと考えている。とくに学生企画のトークセッションは、結局何が深まったのだろうという疑問がどうしても残ってしまう。映画の知識がない側からすると、映画ファン同士の会話はとても興味深かったが、知識のある人にはあまり新しいものは得られなかったのではないかと考える。今回の問題点は、トークセッションを行う7人とサクラの学生の間で内容や流れの相談や、話す順番や役割分担などについて決めておけなかったことである。話を振られてから少し沈黙が起きたことが何回もあり、また映画館派と家派にわかれたこともあまり活かせなかったと思う。今回はとにかく準備時間が足りなかったことが一番の問題なのだが、それでも当日、イベント直前に少しでも2人の講演者とトークセッションの内容について情報を共有出来ればよかったと思う。
- アンケートにも意見があったように、トークセッションの話題が散漫になり、地域課題の解決という目的が見えなかったことは反省すべき点であると思った。司会に任せてしまう形になってしまったので、事前に全員で話し合い、トークセッションでの進行の仕方などを決めておくべきだったと思う。だが、一般の方々が積極的に参加してくださったおかげで、とても良いイベントになったと思う。
- 講演のあとの質問や学生によるトークセッションでは、参加者の方もたくさん発言してくださり、映画に詳しい方が多い印象があった。私は、映画をよく知らない人でも楽しめるイベントにしたいと思っていたが、逆に映画好きの方がたくさん来てくださったおかげで、深い話し合いができ、参加者の方々もより映画に親しみをもってくださったと思うので、とてもよかったと思う。トークセッションに渡邊さんと根岸さんも参加していただいたことにより、普通は聞けない貴重なお話が聞ける良い機会になったのではないかと考える。
- トークセッションは大いに盛り上がった。参加者それぞれが映画に対して異なる考

え方や楽しみ方をしており、ただ、映画館で見たり、DVD を借りて家で一人で見る以外にも様々な鑑賞の仕方があることが理解できた。ただ、十分だと思っていたトークセッションの時間が足りず、半ば強引に結論をもって行ってしまったので、時間を延長することができれば、より深い話が聞けたかもしれない。

- トークセッションの場では、映画の鑑賞を教育に取り入れるべきだという素晴らしい意見がいくつか出た。かつては、小中学生が一つの場所に集まって映画を鑑賞する機会があったことを知った。何十年経っても忘れることができないような作品に、幼いころ、年配の方々は出会っていたのである。幼少期における映画鑑賞の機会の減少が実際に起こっているとしても、トークセッションの場で結論づけられたその減少の理由が、事実なのかはわからない。なぜなら、参加者やパネリストが教育現場の関係者ではないからだ。しかしそこで結論づけられた、「再び教育と映画を結びつける重要性」は現代人の生の声であり、とても貴重なものだと思う。私は、こうした意見が、ぜひ教育関係者を含むもっとたくさんの人に届いてほしいと思った。F スクエアの小ブースでこれほど熱い議論があつて、ここだけでとどまっているのがもったいないとすら感じた。そして、これらの大切な意見を何かにつなげることができるように、運営の改善をしながら、このようなイベントを次年につなげていきたい。

福井の未来を話しねま！

ふくいシネマラボ

2019 2/3(日)

場所:アオッサ7階 Fスクエア

講演×トークセッション **参加無料**

START 14:00
展示は 12:00 から

1 基調講演 14:00~15:30

2/9 から福井メトロ劇場で映画『僕の帰る場所』2週間限定公開が決定！

「『僕の帰る場所』をメトロ劇場で公開する意義」
映画『僕の帰る場所』プロデューサー
渡邊 一孝氏

「地域の中でメトロ劇場が果たす役割」
福井メトロ劇場代表
根岸 輝尚氏

2 福井大学国際地域学部の学生×映画人×参加者
トークセッション 16:00~17:00
テーマ「地方における『小さい映画』と『小さい映画館』の在り方」

ここだけでしか見られない！
『僕の帰る場所』とメトロ劇場の貴重な資料展示も！
展示コーナー 12:00~17:00

お問い合わせ 福井大学国際地域学部支援室 TEL:0776-27-9936 E-mail: s-gcssien@adu.u-fukui.ac.jp
ふくいシネマラボ Twitter @fuku_cinematlab
【企画・主催】福井大学国際地域学部 【協賛】福井メトロ劇場

ふくいシネマラボ

福井の未来を話しねま！

◆福大生による
トークセッション

テーマ
「地方にとっての“小さい映画”
と“小さい映画館”の在り方」
地方都市における映画文化の在り方について、自由に話し合う

◆講演

- ・「『僕の帰る場所』をメトロ劇場で公開する意義」
映画『僕の帰る場所』プロデューサー **渡邊一孝氏**
- ・「地域の中でメトロ劇場の果たす役割」
福井メトロ劇場代表 **根岸輝尚氏**

2019年 **2月3日(日)**

【企画展示】 12:00~17:00
【講演】 14:00~17:00

【場所】 AOSSA7階 Fスクエア

参加無料

【主催】福井大学国際地域学部
【協賛】福井メトロ劇場

お問い合わせ
福井大学国際地域学部支援室
TEL:0776-27-9936
Email: s-gcssien@adu-u-fukui.ac.jp
Twitter: @fukui_cinematlab

4. アンケート結果

イベント当日、来場者を対象にアンケート調査を実施した。回収が思うように捗らず、サンプル数は母集団（参加者数）の6割に満たなかったが、得られたデータは、今後、同様なイベントを開催する際に参考となるものである。

【アンケート作成・集計・結果分析：長田優輝、福井理文】

《アンケート内容（アンケート用紙）》

福井の未来を話しねま！ ～ふくいシネマラボ～ アンケート

本日はご来場いただきまして、まことにありがとうございます。
お手間を取らせて恐縮ですが、以下のアンケートにご協力ください。

※ご自身に当てはまるものに○を付けてください。

- （年齢） 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上
- （性別） 男性 / 女性
- （住所） 福井市在住 / それ以外（お差し支えなければ、ご在住市町村名をご記入ください） _____
- （このイベントを知ったきっかけ） 新聞 / テレビ / ポスター / ロコ
ミ / その他 _____

1. 本日のイベントの満足度の大きさを次の数字から選び、○を付けてください。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

2. そのように思われた理由をお聞かせください。

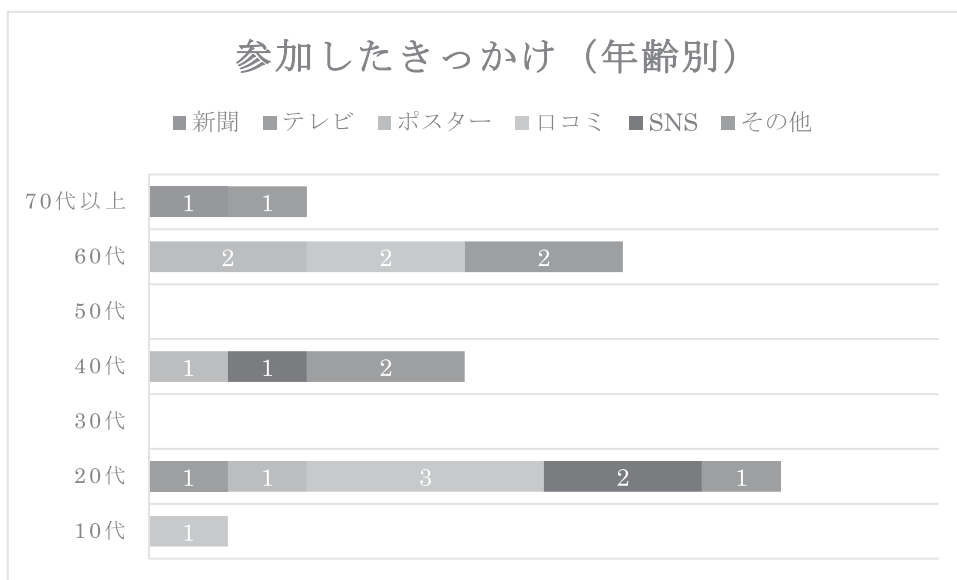
3. 今回のイベントは「学生が行う、地域の課題解決のためのプロジェクト」のひとつとして構想されたものです。今後、同様の趣旨でプロジェクトを企画する場合、どのようなテーマが望ましいとお考えでしょうか。ご意見やアドバイスをいただければ幸いです。

最後までご回答いただき、ありがとうございました！

《アンケート結果（集計と分析）》

参加者（学生・教員以外）：37人

アンケート回答数：21人



※その他の内訳

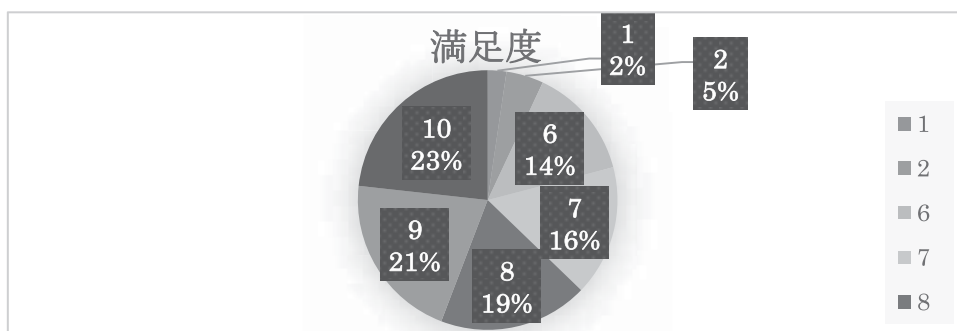
メトロ劇場のHP 3人

メトロ劇場のチラシ 1人

SNS 知人の Facebook, 劇場の Twitter

協会・幼稚園 (?)

→口コミが結局一番多かったが、その口コミがどこから始まっているかが大事だと思う。今回はやはり、メトロ劇場に馴染みのある人たちを中心に情報が拡散されたように思える。一番効果的だったのは、メトロ劇場発信の SNS (HP、チラシ、Twitter) だったと考える。



統計的に、満足度「8」以上だと絶対的にいい評価。8以上の人の割合が63%なので、

満足した人は半分より多いくらい。

- 満足度が高い人の意見

1. そう評価した理由

- 業界の人と学生が話すいい機会
- ニーズに対応しようとしている努力が伝わった。メトロ劇場に行ってみたい
- 日頃聞けない、映画に直接かかわっている人の話。今後生き残るために必要なことを、強く感じられた
- 地域の映画館と上映する映画の両方の方から話が聞けて良かった
- 映画そのもののテーマは別として、届ける側の話や信念が知れて良かった
- 映画の新しい視点を知れた
- 特殊な分野で戦う意義を知れた（40年来のメトロファン）
- 小さな映画館の魅力がひしひしと伝わった（トークセッションのみ参加）
- 司会も良かった
- 講演中の、学生の動く音や歩く音が気になった。全体への配慮を
- 「小さい映画」等、言葉の定義づけが良くわからず、地域課題解決という印象は無かった。トークも散漫になっていた印象
- 好きな映画をおすすめしあいたい

2. 今後のテーマの参考

- 人口流出は止まらないと思う。その上で、行政、企業、県民、文化、インフラという社会全体でどう取り組むか
- 福井県独自の文化を、どう残していくのか、継承していくのか
- 環境、音楽
- 空き家の有効活用、行政との連携で空き家を地域のコミュニケーションの場に
- 長い目で解決していく、長期プロジェクトとして根付くもの

- 満足度が低い人の意見

1. そう評価した理由

- 福井の映画の実状を客観的なデータ（数値）で知れた
- メトロ劇場の現状、映画に対する情熱に感動した
- メトロが具体的に行っていることがよくわからなかった

- 映画を上映する側のお話や意見を聞く機会が今まで無く、面白かった
- トークセッションでは映画館と地域の人々が意見を交わせるいい機会になっていた
- 地域活性化の、導入として映画というテーマはよかった

2. 今後のテーマの参考

- 魅力のない福井をどう変えるのか
- イベントで終わるのでなく、長く地域の課題に学生が関われるもの
- メトロさんの話は、映画以外にも通じるものがあると思う。他のテーマでもラボを開いて欲しい

反省：来場者がメトロ劇場に普段から馴染みのある人かどうかがわかる項目を設けていたら、今後の宣伝・広報活動に役立つデータがとれたかもしれない。

5. 総括

今回のプロジェクトを学年を超えた合同クラスで実施することが決まったのは9月の半ばのことであり、急遽与えられた「お題」にどのように取り組めばよいのか、学生、教員ともに、誰もが多かれ少なかれ戸惑いを覚えたに違いない。その内容を曲がりなりにも承知の上でこのプロジェクトを選択した3年生はまだしも、とりわけ2年生にとっては、唐突の感が否めなかったことだろう。「2年の前期の課題探求プロジェクトと違い今回は「やらされた」課題探求プロジェクトであるという点がモチベーションの低さの大きな原因だろう。今までやっていた自分たちでテーマを選び、日ごろの授業から自分たちで動かしていた「課題探求プロジェクト」とは大きく違い、今回はテーマも決められ日々の活動も先生が動かしていく形となっていた」と指摘する2年生もいたが、そうした思いが彼らの取り組みの姿勢に悪影響を与えたのかもしれない。3年生からは、「メッセージアプリ上で2年生に意見があるか問いかけても、レスポンスがないまま時間が経過し、結局再度問いかけても3年生の意見を全肯定するだけという事態がしばしば発生してしまった。その悪循環を解消する為に、時間を決めて各グループで話し合いを設け、グループで出た意見として全体に持ち込むというやり方を行ったところ、2年生も意見を出してくれるようになった。ただ授業内で話し合いを行う際、再び2年生が黙ってしまう傾向にあった」という指摘があった。

どのようにすれば一本の映画のPRをすることが「課題探求プロジェクト」という授業の趣旨に適った取り組みになり得るのだろうか。この問いかけに対して、『僕の帰る場所』という「小さな映画」のみならず、それを上映する福井メトロ劇場という「小さな映画館」の存在意義をも訴えるイベントを映画の公開に先駆けて実施することに答えを見出したが、そこまでにひと月以上の時間を要したことで、宣伝・広報活動に使える

時間が自ずと限られてしまった。最終レポートの中で学生たちが口々に指摘しているのも、まさにその点である。

- イベント全体を見ると、多少のバタつきはありながらも時間通りにイベントを進めることが出来た上、来客数が多く盛況のうちに幕を閉じることが出来た。ただ詳細を見ると、講演とトークセッションの間の時間に帰ってしまった参加者がいたり、アンケートを全て回収できなかつたりするなど、参加者とより距離を縮めた運営をする上でもう少し努力が必要だった点がいくつか見られる。今後の課題探求プロジェクトで同様なイベントをする機会があれば、それらの細かい点を詰める時間を取るためにも、より早い時期から準備を進めることが重要だ。
- 今回のPBLの総括的な反省点として、準備不足があげられる。パネル展示やトークセッションなど、もう少し学生間で構成を練ってより工夫を凝らしていたら、もっと来場者の方々や渡邊さん、根岸さんにとっても有意義なイベントにできたと考えられる。しかし、イベント自体は思っていたより多くの方が来てくださったたり、アンケートの満足度もそこそこ高かったので、失敗ではない。この経験を生かしてまた自分たちでこういったイベントを行う時にもっと深い内容のものができたらと考える。
- イベント全体の反省としては、まず企画や準備をするまでの期間が非常に短かったため、万全に整えることができなかったことである。特に会場も想定していた人数よりも来場者が多かったためかなり手狭な印象を受けたので、次回はもっと広い会場でできるといいと思った。また、場所も駅前ということで交通の便はよかったが、会場自体はアオッサの7階ということであまり人目に付かず、途中参加や立ち見の人というのは全くいなかった。今回のような多くの人に知ってもらうことが目的の宣伝イベントはもっと人目に付くような場所で気軽に参加できる雰囲気で行えるといいのではないかと思った。
- 構想、準備共に時間が少なく、不安を残したままのイベント開催であったが、予想に反し盛況であった。次にこのようなイベントを企画する場合には、会場の大きさの綿密な確認とスペースの有効活用、来場者参加型のイベントの際には余裕を持ったタイムスケジュールを計画しようと思う。
- アンケートにもあった通り、このようなイベントで市民や県民の方々と意見交流の場を設けることで、地域貢献や地方創生の足掛かりの1つになれるのではないかと思った。今回は準備期間が短く、至らぬ点も多かったが、しっかり準備をして広報すればもっとたくさんの方々に参加していただけるのではないかと思う。今回の開催で、予測より多くの人たちが参加してくれることが分かったので、今後ともこのようなイベントは定期的に行うと、福井の活性化につながるのではないかと考えた。

このように反省点は少なくなかったが、地方における映画文化について異なる世代の住民が膝を突き合わせて意見を交わす機会がこれまでになかなかだけに、こうしたイベントの開催を実現できたことそれ自体に少なからぬ意義があったと言えるだろう。

▼渡邊一孝氏の講演の様子



▼根岸輝尚氏の講演の様子



▼トークセッションの様子



▼映画ポスター（福井メトロ劇場提供）の展示の様子



おわりに

本冊子は、2018年度に国際地域学部グローバルアプローチ2年生13名が行った「課題探求プロジェクトⅠ・Ⅱ」、及び同グローバルアプローチ3年生8名が行った「課題探求プロジェクトⅢA」、4名が行った「同ⅢB」の活動成果報告書となります。

グローバルアプローチの「課題探究プロジェクト」(PBL)には、2つのクラスがあり、学生はそのどちらかを選択することになっています。強いていえば、社会的な視点を持つクラスと、文化的な視点を持つクラスと言えるかと思います。このクラスは後者で、外国の文化、文学、言語等を専門にする教員が学生の主体的な学びを助言する役割を担っています。簡潔に言えば、福井県国際交流会館主催のフェスティバルでの実習、映画の自主上映、自主制作映画の広報が、本年度の活動の内容になりますが、どれも国際的な視点を内包する地域振興への取り組みと言えるでしょう。国際交流会館での実習では、地域の様々な人々、外国人との交流を通じて、所謂グローカリズムを身をもって体験し、何らかの新たな知見を得ることができたことと思います。自主上映の取り組み、及び自主制作映画の広報では、企画立案、イベントの広報、そして実施といった流れを通じて、市役所や映画館や新聞社など様々な社会の公器との関わりを経験し、新たな視座を得るとともに、一つのイベントをやり遂げるという大きな喜びを感じることができたのではないかと思います。そして、どのPBLにおいても、地域の文化的振興のささやかな一助を担うことができたのではないかと思います。もちろん、学生の報告にあるように、様々な反省点もあり、うまくいかなかった部分も含めて、本年度のPBLの成果と言えるのだと思います。

最後になりましたが、このPBLに関して様々な形で、ご協力、ご支援頂きました関係諸機関、個人の方々に厚く御礼申し上げます。